

# 三合新遺跡 発掘調査報告 三合新芹谷遺跡

—— 国道359号砺波東バイパス建設に伴う  
埋蔵文化財発掘報告Ⅱ ——

2017年

# 三合新遺跡 発掘調査報告 三合新芹谷遺跡

—— 国道359号砺波東バイパス建設に伴う  
埋蔵文化財発掘報告Ⅱ ——

2017年

公益財団法人 富山県文化振興財団  
埋蔵文化財調査事務所

# 序

一般国道359号は、富山県の富山市から砺波市を経て石川県の金沢市に至る幹線道路です。砺波東バイパスは、そのうちの砺波市芹谷から高道の間計画されています。

本書は、その建設に先立って平成27年度に実施した、三合新遺跡と三合新芹谷遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

三合新遺跡は砺波市の東部、芹谷野段丘上の縁辺部に位置し、眼下に広がるは緑と水の豊かな砺波平野、遠く北には二上山を望むことができます。発掘調査の結果、縄文時代中期の竪穴建物群がみつかりました。当時の建物の姿はほとんど失われ、残されていたのは柱穴だけでしたが、人々がここに集落をつくり、暮らしていたことが明らかになりました。

三合新芹谷遺跡も芹谷野段丘上に位置しており、発掘調査の結果、縄文時代後期の深い土坑がみつかりました。東を流れる和田川へ、段丘斜面を移動する動物を捕らえるための落とし穴と考えられ、当時の狩猟方法の一端を垣間見ることができました。

こうした発掘調査の成果が、文字の記録に現れることのない人々の生活をひもとく一助となり、地域の歴史と文化財の理解に役立てば幸いです。

本書をまとめるにあたり、ご協力とご指導を頂きました関係機関および関係諸氏に厚く感謝申し上げます。

平成29年 3月

公益財団法人 富山県文化振興財団  
埋蔵文化財調査事務所

# 例 言

- 1 本書は富山県<sup>と な み</sup>砺波市<sup>み あ い し ん</sup>三合新地内に所在する<sup>み あ い し ん</sup>三合新遺跡、同<sup>み あ い し ん</sup>三合新・<sup>せ り だ に</sup>芹谷地内に所在する<sup>み あ い し ん</sup>三合新芹谷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は国土交通省北陸地方整備局からの委託を受け、公益財団法人富山県文化振興財団が行った。本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。  
調査期間 三合新遺跡 平成27(2015)年7月9日～8月29日  
三合新芹谷遺跡 平成27(2015)年7月3日～8月10日  
整理期間 平成28(2016)年4月1日～平成29(2017)年3月31日
- 3 調査に関する全ての資料、出土遺物は、本書刊行後、富山県埋蔵文化財センターで保管する。
- 4 遺跡の略号は市町村番号に遺跡名を続け、三合新遺跡を「08MS」、三合新芹谷遺跡を「08MS S」とし、遺物の注記には略号を用いた。
- 5 本書の本文執筆・編集は新宅茜が担当した。石材については明治大学黒耀石研究センター客員教授中村由克氏に鑑定を依頼した。自然科学分析については専門機関に委託し、その成果を収録した。
- 6 本書で使用している遺構の略号は以下のとおりである。  
SB：掘立柱建物、SI：竪穴建物、SD：溝、SK：土坑、SP：柱穴
- 7 遺構番号は遺構の種類に関わらず連番とし、掘立柱建物、竪穴建物には新たに番号を付した。
- 8 本書で示す座標は平面直角座標系第7系（世界測地系）を基準とし、方位は全て真北、標高は海拔高である。
- 9 挿図の縮尺は下記を基本とし、各図の下に縮尺率を示す。  
遺構 掘立柱建物：1/80、竪穴建物・溝・土坑・柱穴：1/40  
遺物 土器：1/3、石製品：1/3、2/3、1/6
- 10 土層及び遺構埋土、土器胎土の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参照した。
- 11 遺物は種類に関わらず連番を付し、本文・挿図・一覧表・写真図版中の遺物番号は全て一致する。
- 12 本文・挿図で扱った遺構・遺物は、一覧表に掲載している。遺構一覧・遺物一覧の凡例は以下のとおりである。  
①遺構の埋土に切り合い関係がある場合は、備考欄に新>古のように記号で示す。  
②遺構の規模の（ ）内は現存長を表す。  
③土器法量の（ ）内は復元長を表す。残存部が少なく、計測不能なものは空欄とした。  
④石製品法量の（ ）内は現存長を表す。  
⑤重量はg単位で示す。計測は大きさによって台秤と電子秤を使い分けた。
- 13 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を得た。記して謝意を表します。(敬称略、五十音順)  
池野正男、高梨清志、野原大輔  
砺波市教育委員会、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター

# 目 次

第 I 章 調査の経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 発掘作業の経過と方法	2
3 整理作業の経過と方法	3
4 調査成果の公開	4
第 II 章 位置と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	5
第 III 章 三合新遺跡	11
1 概 要	11
2 層 序	11
3 遺構と遺物	11
4 総 括	39
第 IV 章 三合新芹谷遺跡	43
1 概 要	43
2 層 序	43
3 遺構と遺物	43
4 総 括	44
第 V 章 自然科学分析	50
1 放射性炭素年代測定	50
報告書抄録	

# 挿図目次

第1図	調査位置図・遺跡位置図	1	第22・23図	三合新遺跡 縄文時代中期 竪穴建物集成1・2	40・41
第2図	調査区割図	2	第24図	三合新芹谷遺跡 全体図	46
第3図	周辺遺跡位置図1	7	第25・26図	三合新芹谷遺跡 遺構全体図	47・48
第4図	周辺遺跡位置図2	8	第27図	三合新芹谷遺跡 基本層序模式図	49
第5図	三合新遺跡 全体図	18	第28図	三合新芹谷遺跡 遺構・遺物実測図	49
第6～8図	三合新遺跡 遺構全体図	19～21	第29図	暦年較正結果	52
第9図	三合新遺跡 基本層序模式図	22			
第10～18図	三合新遺跡 遺構実測図	22～30			
第19～21図	三合新遺跡 遺物実測図	31～33			

# 表目次

第1表	既往の調査一覧	2	第9表	三合新遺跡 古代土器一覧	38
第2表	調査体制・調査一覧	3	第10表	三合新遺跡 石製品一覧	38
第3表	整理体制	3	第11表	三合新芹谷遺跡 土坑一覧	49
第4表	周辺遺跡一覧	9・10	第12表	三合新芹谷遺跡 石製品一覧	49
第5表	三合新遺跡 竪穴建物一覧	34	第13表	測定試料および処理	50
第6表	三合新遺跡 掘立柱建物一覧	35	第14表	放射性炭素年代測定および 暦年較正の結果	51
第7表	三合新遺跡 土坑・溝一覧	35			
第8表	三合新遺跡 縄文土器一覧	36・37			

# 図版目次

図版1	航空写真 (2009年撮影)	図版9	三合新遺跡 土坑
図版2	航空写真 (1961・1975年撮影)	図版10	三合新遺跡 土坑・倒木痕
図版3	三合新遺跡 遠景	図版11	三合新遺跡 縄文土器
図版4	三合新遺跡 全景	図版12	三合新遺跡 縄文土器・須恵器・ 土師器・石製品
図版5	三合新遺跡 竪穴建物群	図版13	三合新芹谷遺跡 遠景
図版6・7	三合新遺跡 竪穴建物	図版14	三合新芹谷遺跡 全景
図版8	三合新遺跡 竪穴建物・ 掘立柱建物・土坑	図版15	三合新芹谷遺跡 全景・土坑

# 第 I 章 調査の経過

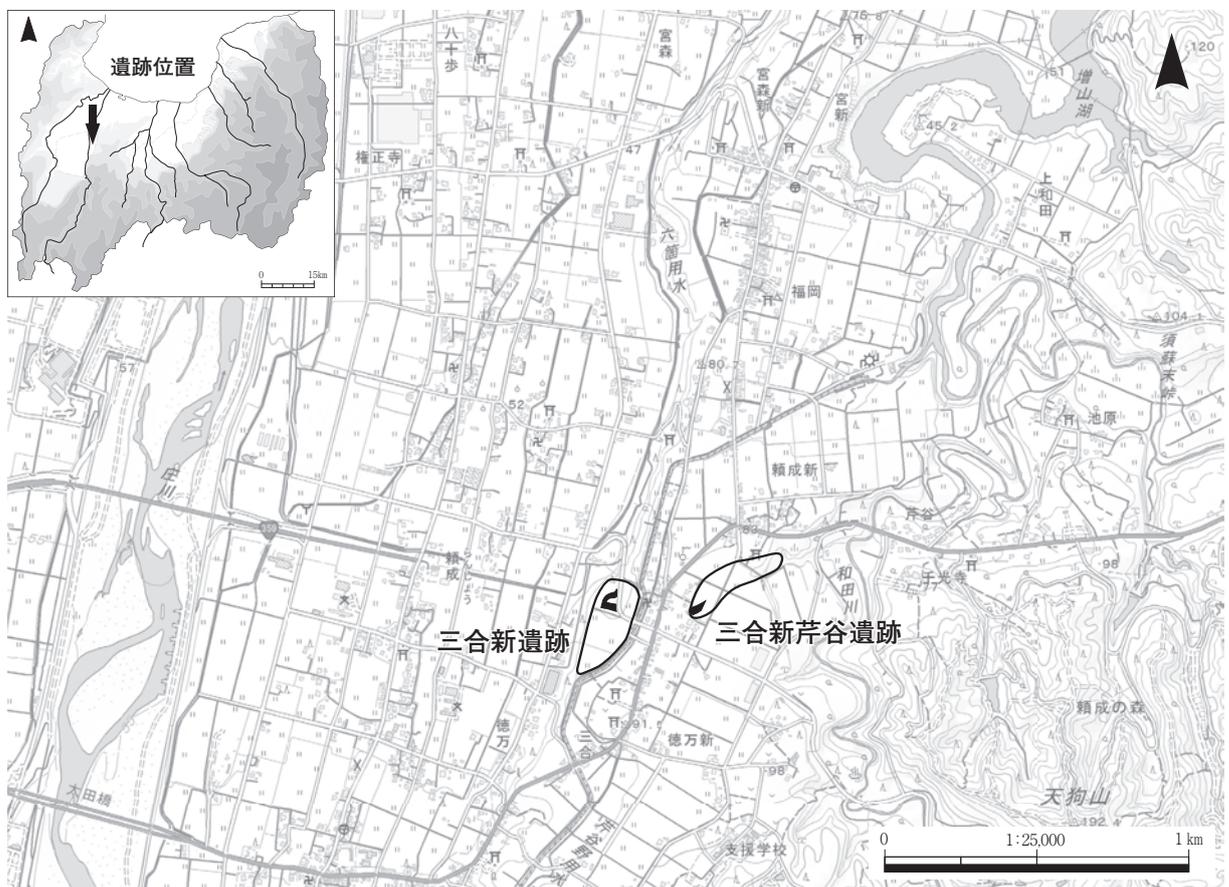
## 1 調査に至る経緯

### (1) 調査の契機

一般国道359号は、富山県の富山市から砺波市を經由して石川県の金沢市に至る幹線道路である。砺波東バイパスは、急カーブ区間、道路幅員狭隘区間の解消、冬期間の路肩堆雪による交通障害の解消、老朽橋梁の代替路確保などのため、砺波市<sup>せりだに</sup>芹谷<sup>たかんど</sup>から高道間に計画された延長6.1kmのバイパスである。平成4（1992）年度に都市計画が決定され、平成10（1998）年度に工事が着手された。平成21（2009）年度までに砺波市高道から<sup>らんじょう</sup>頼成（県道新湊庄川線以西）までの4.5kmが開通している。

平成14（2002）年に国土交通省北陸地方整備局富山工事事務所（以下、国交省）と砺波市教育委員会が協議し、平成14（2002）年度に砺波市教育委員会が主体となり、庄川以東の分布調査を実施することになった。その結果、三合新遺跡、三合新芹谷遺跡を含む5箇所<sup>5箇所</sup>の埋蔵文化財包蔵地を確認した。

平成26（2014）年7月に徳万頼成遺跡・三合新遺跡・三合新芹谷遺跡・梅檀野神社東遺跡の確認調査を砺波市教育委員会が実施し、この確認調査の結果を受けて、平成26（2014）年8月に、国交省、富山県教育委員会、公益財団法人富山県文化振興財団（以下、財団）が協議し、平成23年11月富山県教育委員会通知の「埋蔵文化財の本発掘調査における対応方針について」に基づき、三合新遺跡と三合新芹谷遺跡の発掘調査を財団が受託することとなった。財団は平成27（2015）年度に三合新遺跡2,030㎡、三合新芹谷遺跡1,130㎡について本調査を実施した。



第1図 調査位置図・遺跡位置図（1:25,000）

## (2) 既往の調査

三合新遺跡、三合新芹谷遺跡の既往の調査は、第1表のとおりである。

第1表 既往の調査一覧

遺跡名	分布調査			確認調査			本調査			
	年度	調査主体	文献	年度	調査主体	調査面積 (対象面積)㎡	年度	調査主体	調査面積 ㎡	文献
三合新	H14	砺波市教委・ 県センター	1・2	H26	砺波市教委	213 (8,120)	H27	財団	2,030	5
	H21	砺波市教委	3							
三合新芹谷	H14	砺波市教委・ 県センター	1・2	H26	砺波市教委	349 (9,810)	H27	財団	1,130	5
	H21	砺波市教委	3							
	H22	砺波市教委	4							

- 文献1 富山県埋蔵文化財センター 2003『富山県埋蔵文化財センター年報 平成14年度』  
 2 富山県埋蔵文化財センター 2004『富山県埋蔵文化財センター年報 平成15年度』  
 3 砺波市教育委員会 2010『砺波市遺跡詳細分布調査報告6 -般若・東般若-』  
 4 砺波市教育委員会 2011『砺波市遺跡詳細分布調査報告7《報告編》-梅檀野・梅檀山-』  
 5 富山県文化振興財団 2016『平成27年度埋蔵文化財年報』

- 参考文献 砺波市教育委員会 2009『徳万頼成遺跡発掘調査報告I』  
 砺波市教育委員会 2011『砺波市遺跡詳細分布調査報告7《遺跡地図編》砺波市遺跡地図』

## 2 発掘作業の経過と方法

発掘調査の作業工程及びその方法・内容は、平成16(2004)年10月に文化庁から示された『行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての標準(報告)』に則って進めた。

発掘調査の基準となるグリッドは、世界測地系による国家座標(平面直角座標第7系)を基に設定した。X0Y0の起点は、三合新遺跡がX70480、Y-13110、三合新芹谷遺跡がX70450、Y-12820で、南北方向をX軸、東西方向をY軸とし、グリッドは2m方眼で、各グリッド名は北東角のX軸・Y軸の座標とした。



第2図 調査区割図 (1:3,000)

第2表 調査体制・調査一覧

実施年度	調査事業担当						
平成27 (2015)	総括	所長 岸本 雅敏	総務	総務課長 主査	松尾 互見 青山	調査総括	調査課長 島田美佐子
						調査員	主査 田中 道子 主任 新宅 茜 主任 町田 尚美
遺跡	期間	延べ日数	面積	担当者	検出遺構	出土遺物	
三合新	H27.7.9～8.29	28日間	2,030㎡	田中 道子 新宅 茜 町田 尚美	竪穴建物・ 掘立柱建物・土坑・ 溝・倒木痕	縄文土器・須恵器・ 土師器・打製石斧・ 磨製石斧・剥片	
三合新芹谷	H27.7.3～8.10	20日間	1,130㎡	田中 道子 新宅 茜 町田 尚美	土坑	須恵器・近世陶磁・石臼	

掘削方法は、表土・盛土は調査員立ち会いのもと、工事請負業者が重機により除去し、包含層はスコップを用いて人力で掘削した後、ジョレンで精査し、遺構を検出した。検出した遺構はマーキングを行い、遺構概略図を作成した。遺構掘削は移植ゴテやネジリ鎌等を用い、遺構埋土を半裁して記録を作成し、必要に応じて自然科学分析用の試料を採取した後、遺構の完掘を行った。また、遺構検出面から深さのある遺構については、空中写真測量終了後に、重機による断ち割りを行って、底面までの断面観察と完掘を行った。

遺構の記録は、断面図を1/20縮尺で実測し、遺構によっては1/10縮尺の遺物出土状況図を作成した。各遺構の断面はデジタルカメラ、遺物出土状況や個別の遺構写真とブロック写真はブローニー判（6×7）カメラ、調査区全景写真には4×5カメラを併用して撮影した。調査区全域の遺構平面図は、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を委託して作成した。

### 3 整理作業の経過と方法

出土遺物は調査年度内に洗浄・注記・分類・接合を行った。遺構実測図・写真は各台帳を作成して整理した。

調査概要については『埋蔵文化財年報』（平成27年度）として発刊している。

報告書刊行に向けての本格的な室内整理作業は、平成28（2016）年4月に開始し、土器・石製品の実測・写真撮影、土器の復元、一覧表・挿図図版・写真図版作成、自然科学分析、原稿執筆、編集、印刷、校正を行った。

遺物の実測は整理作業員が行い、一部を調査員が行った。遺物の写真は調査員が撮影した。石製品はメモ写真を撮影して、整理台帳を作成し、遺構実測図・写真の各台帳と遺物実測図はパーソナルコンピュータを使用して、調査員がデータ入力を行った。遺構・遺物のデータは一覧表として掲載している。遺構・遺物の挿図は、派遣オペレーターがデジタルデータ化を行い、印刷原稿とした。自然科学分析は専門業者に委託し、結果報告を第V章に掲載した。

第3表 整理体制

実施年度	整理事業担当						
平成28 (2016)	総括	所長 岸本 雅敏	総務	総務課長 主査	松尾 互見 青山	整理総括	調査課長 島田美佐子 副主幹 田中 道子
						担当	主査 新宅 茜

## 4 調査成果の公開

三合新遺跡では、発掘調査の成果を公開するため、平成27年8月29日に遺跡説明会を開催した。

天候に恵まれ、地元の方々を中心に、約50名の参加があった。まず、遺跡全体の概要を説明したあと、調査区内を参加者とともに回って、縄文時代の竪穴建物の解説を行いながら、質問等に対応した。調査区内に設置したテントでは、出土遺物を展示し、解説を行った。なお、遺跡説明会の後日、北日本新聞に掲載された。





### 縄文の生活跡興味深く

砺波 三合新遺跡で住民説明会

砺波市の三合新遺跡の発掘調査が終わり、地元住民を対象にした説明会が29日、現地

中期や奈良・平安時代の生活跡が見つかった発掘現場を見学した。

県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所の担当者から、縄文中期の竪穴住居7棟分とみられる柱穴群、土器が捨てられた土坑、奈良・平安時代の掘立柱建物2棟の遺構が見つかる

竪穴住居とみられる遺構を見学する住民

三合新遺跡

で開かれた。訪れた人が縄文

の跡が見つかった発掘現場を見学した。

平成27年8月30日  
北日本新聞

ったことを聞き、それぞれの遺構を見学した。縄文土器や石斧、須恵器や土師器などの遺物も展示された。近くの坂井多鶴夫さん(63)は「こんな身近な場所で4千年前から人が住んでいたとは驚く」と話した。

調査は、国道359号砺波東バイパス建設に伴い、国土交通省富山河川国道事務所からの委託を受け、同事務所が7月から行ってきた。来週には埋め戻しが始まるという。

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 1 地理的環境（第3図）

三合新遺跡と三合新芹谷遺跡は、富山県西部を流れる庄川の右岸にある<sup>せりだんの</sup>芹谷野段丘上に位置する。芹谷野段丘は、庄川の河川作用によって形成された河岸段丘の中でも高位段丘にあたり、南は砺波市安川付近から、北は射水市串田までの南北約10kmに細長く伸びている。芹谷野段丘の西側には、砺波平野が広がっており、その大部分は庄川によって形成された扇状地である。庄川扇状地は県内の三大扇状地の中でも最大規模を誇り、扇頂部の砺波市青島から扇端部の高岡市福岡町付近まで、面積は約146km<sup>2</sup>に及ぶ。扇状地上には微高地が島状に点在し、そこにマッドと呼ばれる黒色有機質土が堆積している。マッドのあるところは、幾度も流れを変えた庄川による氾濫の影響が少ない、比較的安定した地形といえる。芹谷野段丘の東側は、和田川とその河川作用によって形成された和田川流域段丘帯を挟んで、<sup>しやうとう</sup>庄東山地へ繋がっている。庄東山地は富山県を東西に分断する射水丘陵帯の一枝群で、和田川は庄東山地と芹谷野段丘の間を蛇行しながら北流し、射水市大島北野で庄川に合流する。

三合新遺跡は芹谷野段丘の縁辺部にあり、遺跡の端は段丘の崖上となる。この崖の高さは平野から30m近くになるため、遺跡の端に立つと眼下に広がる砺波平野の散居村と、その向こうに連なる西山丘陵、二上丘陵までもが一望できる。縄文時代と近世の散布地として登録されており、遺跡の面積は42,000m<sup>2</sup>、標高は約79～80mである。三合新芹谷遺跡は芹谷野段丘上から和田川流域段丘帯に向かって、わずかに下り傾斜となりながら、細長く伸びている。縄文時代・中世・近世の散布地として登録されており、遺跡の面積は27,500m<sup>2</sup>、標高は約74～85mである。

### 2 歴史的環境（第3・4図、第4表）

三合新遺跡と三合新芹谷遺跡が立地する芹谷野段丘周辺には、段丘から丘陵部および砺波平野にかけて、多くの遺跡が分布する。ここでは、旧石器時代から近世までの遺跡について記述する。

#### 旧石器時代

<sup>せりだに</sup>芹谷遺跡（42）、池原遺跡（44）、頼成D遺跡（46）、<sup>たかざわじま</sup>高沢島I・II遺跡（73）で、ナイフ形石器などがみついている。いずれの遺跡も段丘から丘陵地に位置する。

#### 縄文時代

草創期から早期までの遺跡はなく、前期でも宮森新北島I遺跡（67）や増山遺跡（70）、久泉遺跡（94）で土器片が出土するものの、遺構は検出されていない。富山県内では、前期までの遺跡数は総じて少なく（町田2010）、この地域でもそれを反映しているとみえる。中期になると遺跡数が急増する。前葉から中葉では、<sup>ごんしやうじ</sup>芹谷野段丘上に厳照寺遺跡（64）、宮森新北島I遺跡、庄川扇状地扇頂部の低位段丘上に松原遺跡（128）、庄川扇状地南側の台地で竹林I遺跡（138）や西原遺跡（139）など、複数の竪穴建物を伴う集落が各所につくられる。ただ、いずれの集落も台地や段丘上に立地しており、低地では久泉遺跡や<sup>ひがしほいしざか</sup>東保石坂遺跡（82）などの散布地だけであったが、前年度の砺波東バイパスの発掘調査の結果、<sup>とくまんらんじやう</sup>徳万頼成遺跡（3）で集落がみつかり、人々の活動が低地へも進出していたことがわかった。後葉から後期初頭では、段丘上にある串田新遺跡（149）で集落がみつかり、後

期から晩期の遺跡は、東別所<sup>ひがしべつしよむじな</sup>所<sup>じょう</sup>が城遺跡（47）や中尾遺跡（111）、孫子<sup>そのこ</sup>ワバラ遺跡（112）など、山間部で遺物がみつまっている程度で、数は少ない。

### 弥生時代

三谷北遺跡（24）や増山城跡（60）、福山大堤遺跡（32）などで土器が出土している程度で、生活痕跡は低調である。社会基盤となった稲作経営に伴い、人々は水を求めて移動しており、湧水帯のある庄川扇状地扇端部の佐野台地付近では、遺跡が多くみつまっている。

### 古墳時代

安川天皇B遺跡（28）や高沢島Ⅲ遺跡（75）など、芹谷野段丘上で土器がみつまっているが、遺構は伴わない。弥生時代から引き続き、人々の生活は扇端部や小矢部川流域左岸で展開している。

### 古代

8世紀になると秋元<sup>あきもとくぼ</sup>窪田<sup>たじま</sup>島遺跡（90）や高道<sup>たかみち</sup>向島<sup>むかいじま</sup>遺跡（102）など、庄川扇状地各所で遺跡が多くみつかるようになる。この背景には、8世紀半ばから東大寺領荘園が設定されたことがあるだろう。砺波郡には杵名<sup>きりな</sup>蛭村、石粟村、伊加流<sup>いかり</sup>伎・伊加留<sup>いかり</sup>岐村、井山村の4箇所があり、金田章裕氏によれば庄川扇状地東端が比定されている（金田1998）。徳万頼成遺跡は井山村の推定地内にあり、水田跡がみつまっている。久泉遺跡は伊加留岐村の南西にあり、荘園へ導水する用水路もしくは運河かと推定されている大溝と、溝管理施設「溝所」と推定されている掘立柱建物群がみつまっている。荘園成立と同じ頃、芹谷野段丘上では大規模な須恵器生産が行われた。梅檀<sup>せんだん</sup>野窯跡群は、増山支群5基と福山支群14基で構成され、8世紀第2四半期から宮森窯跡（78）と安川天皇窯跡（30）を初めに操業を開始し、9世紀に盛行した。また、増山支群周辺では池原向島遺跡（51）などの製鉄関連遺跡もみつまっている。

### 中世

11世紀に東大寺領荘園が荒廃し、12世紀頃に徳大寺家領般若野荘が成立すると、9世紀以降に激減した遺跡も12世紀以降に再び増加する。庄川扇状地では、久泉遺跡や高道向島遺跡などで掘立柱建物を中心とする集落がつくられる。これらは古代の集落と重なっているところが多い。丘陵部では、増山城跡や安川城跡（110）などの中世城郭が築かれる。とくに増山城跡では、城郭下の増山遺跡にその城下町が残り、城郭規模の大きさを物語っている。

### 近世

庄川扇状地の多くの遺跡で陶磁器が出土し、広範囲で生活痕跡をみつけられるようになるが、建物の検出例は少ない。それは掘立柱建物から土台建物へと、遺構としては検出しにくい建物構造に変化したためと考えられる。また、砺波平野の代名詞たる“散居村”がつくられたことも要因にあげられよう。散在している集落は、近世も現在も同位置であることが多く、今日の水田を調査しても、近世の建物はみつからないことになる。芹谷野段丘上では、寛文3（1663）年に芹谷野用水の開削が始まった。この用水によって新田開発が行われ、段丘上に20もの新村が誕生している。

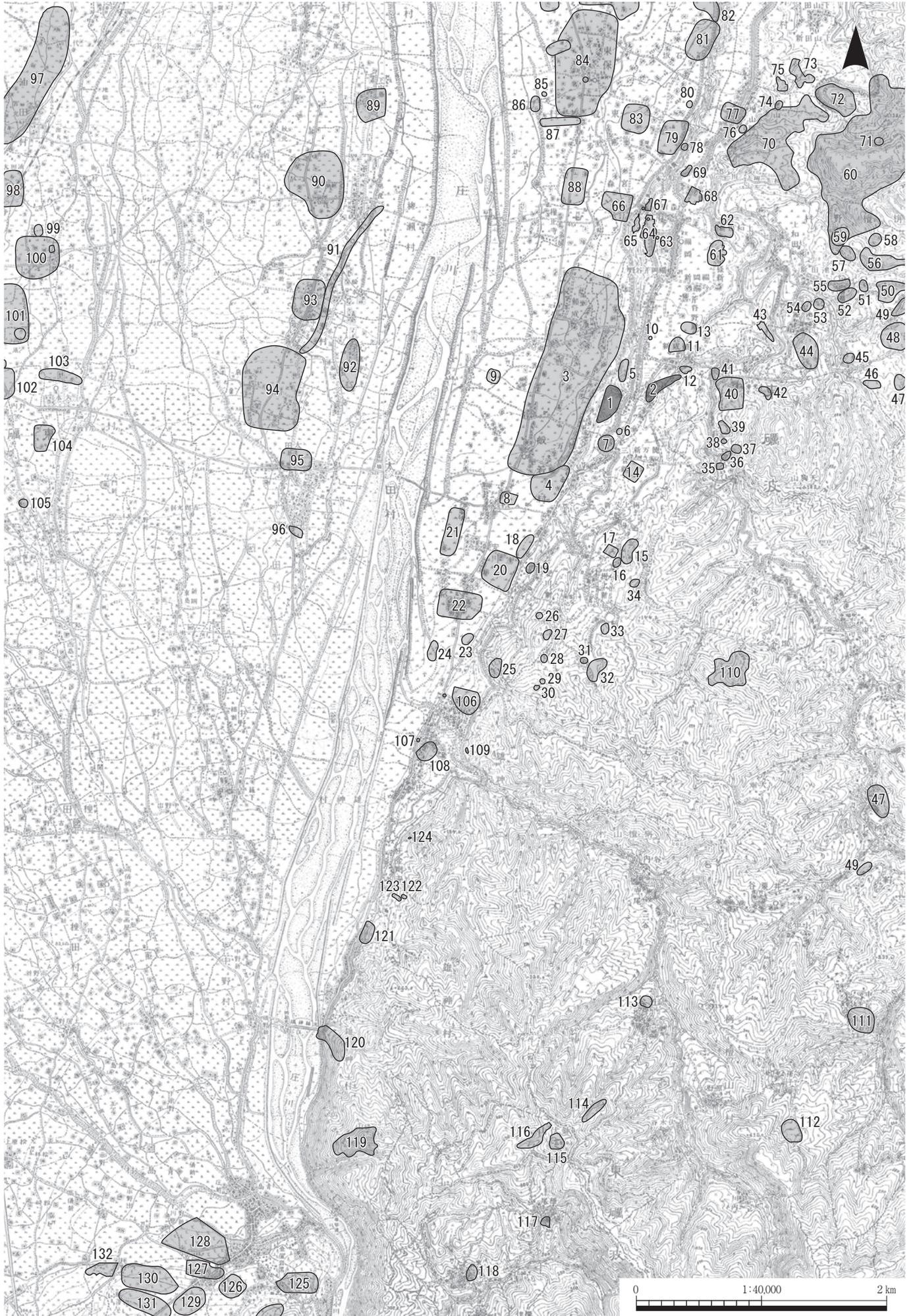
### 引用・参考文献

- 砺波市 1990『砺波市史資料編1 考古、古代・中世』  
 金田章裕 1998『古代荘園図と景観』東京大学出版会  
 野原大輔 2010『砺波市遺跡詳細分布調査報告6－般若・東般若－』砺波市教育委員会  
 2011『砺波市遺跡詳細分布調査報告7－梅檀野・梅檀山－』砺波市教育委員会  
 町田賢一 2010『富山県における縄文遺跡のあり方－地形分類図から見た遺跡分布－』『富山考古学研究 紀要第13号』  
 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所



第3図 周辺遺跡位置図1 (1:150,000)

この地図は、国土地理院発行の20万分の1地形図(富山・高山・七尾・金沢)を一部改変したものである。



第4図 周辺遺跡位置図2 (1:40,000)

この地図は、国土地理院発行の2万分の1地形図(宮森新・山田・出町・福野(明治43年測図))を一部加筆したものである。

第4表 周辺遺跡一覧(1)

No	遺跡名	立地	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	No	遺跡名	立地	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
1	三合新	段丘		◎ 中期前～中： 竪穴建物、土器					○	51	池原向島	段丘						●			
2	三合新芹谷	段丘		○ 後期前～中： 土坑					○ ○	52	須蘇末峠	段丘							●		
3	徳万頼成	扇状地		◎ 中期前～中： 竪穴建物、土偶		★ ★	◎		○	53	狐塚	段丘							○		
4	徳万	扇状地		○ 中期後～後期初： 土器		○			○	54	狐塚	段丘								▲	
5	徳万新	段丘					○			55	須蘇末峠A	段丘							●		
6	庚申塚	段丘							▲	56	金クソ山	丘陵							●		
7	三合	段丘								57	金クソ山西	丘陵							●		
8	安川二目	扇状地		○						58	増山赤坂窯跡	丘陵								■	
9	頼成川原	扇状地						○		59	増山団子地 窯跡	丘陵								■	
10	長尾為景塚	段丘							▲	60	増山城跡	丘陵		○		○	◎	□	○		
11	長尾能景塚	段丘							▲	61	宮森新天池	段丘		○							
12	梅檀野神社東	段丘		○						62	上和田	段丘		○ 中期前、晩期中： 土器						○	
13	頼成新	段丘		○						63	厳照寺境内	段丘								▲	
14	三合宗九郎島	段丘					○ ○			64	厳照寺	段丘		◎ 中期前： 竪穴建物、埋甕					○		
15	福山窯跡	段丘					■			65	大谷島	段丘		○					○		
16	福山№1	段丘		○						66	宮森	扇状地		○					○		
17	福山	段丘					○ ○			67	宮森新北島Ⅰ	段丘		◎ 中期前：竪穴建物				◎	○	○	
18	安川山下	扇状地					○			68	宮新	扇状地							○		
19	薬勝寺	段丘					○ ○			69	宮森新北島Ⅱ	段丘		○						○	
20	安川正守	扇状地					○ ○			70	増山	段丘		○ 前期後～後期前： 土器					○	◎	◎
21	安川宮村	扇状地					○ ○			71	増山池ノ平等 窯跡	丘陵								■	
22	安川野武士	扇状地					○ ○			72	増山裏亀山	丘陵								◎	○
23	安川野武士A	扇状地					○ ○			73	高沢島Ⅰ・Ⅱ	段丘	○ ○	○ 前期末～中期前： 土器					◎	○	
24	三谷北	扇状地					○ ○ ○			74	増山亀田窯跡	段丘								■	
25	安川天皇C	段丘		○						75	高沢島Ⅲ	段丘		○					○	○	
26	安川天皇D	段丘		○						76	増山妙覚寺坂 窯跡	段丘								■	
27	安川天皇A	段丘		○						77	増山西	段丘								○ ○	
28	安川天皇B	段丘		○			○			78	宮森窯跡	段丘								■	
29	安川天皇Ⅰ	丘陵					■			79	宮森廃寺	扇状地								△	
30	安川天皇窯跡	丘陵					■			80	行者塚	扇状地								▲	
31	福山大堤窯跡	丘陵					■			81	東保石坂南	扇状地								○	
32	福山大堤	丘陵		○						82	東保石坂	扇状地		○ 中期中～後期初： 土器						○ ○	
33	福山小堤窯跡	丘陵					■			83	宮森道川島	扇状地								○ ○	
34	福山№2	丘陵						○		84	東保	扇状地		○						○ ○ ○	
35	生玉明神跡	丘陵						△		85	東保般若堂	扇状地								△	
36	生玉明神北	丘陵					■			86	高坪	扇状地								○ ○	
37	金比羅山	丘陵						○		87	八十歩	扇状地		○						○ ○	
38	日宮南	丘陵					■			88	宮森西島	扇状地								○ ○	
39	日宮跡	丘陵						△		89	下中条	扇状地								○	
40	千光寺	丘陵						△ △		90	秋元窪田島	扇状地								○ ◎ ○	
41	芹谷下大門	丘陵						○ ○		91	久泉大溝跡	扇状地								○	
42	芹谷	丘陵		○ ○			○			92	柳瀬久遠寺	扇状地								○ ○	
43	芹谷北秘秘寺	段丘		○						93	柳瀬	扇状地								○ ○	
44	池原	丘陵		○ ○			●			94	久泉	扇状地		○ 前期末～後期末： 土器・打製石斧						◎ ◎ ○	
45	頼成A	丘陵		○						95	太田北	扇状地								○	
46	頼成D	丘陵		○						96	太田	扇状地								○	
47	東別所狛が城	丘陵		○ 後～晩期：石刀						97	千代	扇状地								○	
48	頼成B	丘陵		○			○ ○			98	堀内	扇状地								○	
49	柳上	丘陵		○						99	宮村	扇状地								○	
50	正権寺	段丘					○			100	中村イシナダ	扇状地								○ ○	

第4表 周辺遺跡一覧(2)

No.	遺跡名	立地	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	No.	遺跡名	立地	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世
101	高道	扇状地					○	○		146	石名瀬A	台地				◎	▲	◎	○
102	高道向島	扇状地					○	◎	○	147	滝	段丘	○	中期前：土器・土偶			●	○	○
103	八思壺神社	扇状地						○		148	常国	扇状地	○	中期後～後期初：土器		▲	◎	◎	○
104	庄下	扇状地						○		149	串田新	段丘	◎	中期後：堅穴建物・石組炉	○	▲		○	○
105	大門	扇状地						○		150	布目沢北	平野	○	前期末～晩期末：土器	○	○	○	○	○
106	三谷東	扇状地						○		151	出来田南	平野	○	晩期：土器			◎	◎	○
107	三谷上野塚	扇状地						▲		152	井口本江	平野	○	晩期：流路・土坑	○	○	◎	◎	○
108	三谷上野	扇状地						○		153	下佐野	台地				▲	▲	◎	◎
109	三谷鉢塚	丘陵						▲		154	東木津	台地				○	◎	○	○
110	安川城跡	丘陵					□			155	諏訪	台地				▲		◎	◎
111	中尾	丘陵	○	晩期：御物石器						156	中保B	台地	○				○	◎	◎
112	孫子ワバラ	丘陵	○	後期中：土器						157	下老子笹川	台地	◎	晩期後：堅穴建物	◎	★	◎	◎	◎
113	五谷	丘陵						○		158	麻生谷	平野				○	◎	◎	
114	鉢伏山北	丘陵					○			159	麻生谷新生園	平野					◎	◎	○
115	鉢伏山城跡	丘陵					□			160	岩坪岡田島	平野	○	前期末：土器			◎	◎	○
116	鉢伏山	丘陵	○							161	堂前	丘陵	○	中期中～後期前：土器			◎	○	○
117	隠尾城跡	丘陵					□			162	須田藤の木	平野				○	◎		
118	名ヶ原	丘陵						○		163	小竹藪	台地	○	中期中～後期後：土器	○	○			
119	千代ヶ様城跡	丘陵					□			164	四十塚	丘陵	☆	中期中～晩期中：貝層		○	○		
120	壇城跡	丘陵	○				○	□		165	惣領浦之前	平野	○	後期初～晩期：土器	○		◎	◎	
121	庄	丘陵						○		166	上久津呂中屋	平野	☆	早期後～後期前：貝層、土偶	◎	○	◎	◎	
122	宗半塚	丘陵						▲		167	越中国府関連	台地	○			○	○	◎	
123	恩光寺跡	丘陵					△			168	北高木	平野	○	後期後～晩期後：土器	○	○	◎	●	
124	金剛寺古墳群	丘陵							▲	169	赤井南	平野					◎	◎	
125	小川原	台地	○				○	○		170	石名山窯跡	丘陵						■	
126	中屋敷	台地					○	○		171	小杉流団No.7	丘陵	◎	中期中：堅穴建物		▲	◎		
127	西野々	台地	○				○	○		172	小杉流団No.3	丘陵	◎	中期中：堅穴建物		▲			
128	松原	台地	◎	中期中：堅穴建物、土偶			○	○		173	小杉丸山	丘陵	○			○	○	■	
129	大丹保	台地			○		○	○		174	小杉流団No.16	丘陵	○	中期後：土器		■	■		
130	金屋ボンボン野B	台地	○				○	○		175	赤田I	平野				○	○	◎	
131	金屋ボンボン野	台地	○				○			176	南太閤山I	平野	○	早期後～晩期中：クルミ塚、土器			◎		
132	示野	台地					○	○		177	黒河尺目	平野	○	中期後：粘土採掘坑、土偶			◎	◎	
133	高瀬	台地	○		○	○	◎	○	○	178	針原西	平野	☆	前期末～中期末：貝層	○			○	
134	在房	台地						◎	○	179	石太郎C	丘陵	○				■		
135	宗守II	台地						◎	◎	180	上野赤坂A	丘陵					●		
136	安居窯跡(口ノ部)	台地							▲	181	天池C	丘陵					■		
137	高畠	台地	○		○		◎	○		182	上野南	丘陵					■		
138	竹林I	台地	◎	中期前～中：堅穴建物・土器捨て場						183	水上谷	丘陵	◎	中期中：堅穴建物					
139	西原	台地	◎	中期中～後：堅穴建物						184	開ヶ丘中山V	丘陵					■		
140	高木山	台地	○	中期前：土器捨て場						185	開ヶ丘狐谷III	丘陵	○	◎	中期前～中：堅穴建物・掘立柱建物、土偶			■	
141	水牧	扇状地						◎	○	186	新町II	丘陵	○	○			◎	◎	
142	桜町	台地	○	早～晩期：水場・環状木柱列	○	○	◎	◎	○	187	鏡坂I	丘陵	○	◎	中期中：堅穴建物、土偶				
143	五社	扇状地						◎	◎	188	前山I	丘陵	◎	◎	中期前：堅穴建物、土偶				
144	石名田木舟	扇状地							▲	189	滝谷	丘陵	◎	◎	中期前：堅穴建物、土偶				
145	戸出古戸出	扇状地							◎	190	小滝谷	丘陵	◎	◎	中期中：堅穴建物				

太字調査歴有り)

◎ 集落 ▲ 塚 △ 社寺  
 ★ 水田 ■ 窯 ● 製鉄  
 ○ 散布地 □ 城 ☆ 貝塚

# 第Ⅲ章 三合新遺跡

## 1 概要

三合新遺跡は、砺波平野東側にある芹谷野段丘が、平野に向かってやや張り出した段丘面の縁辺部に位置する。段丘崖は約20mの高さがあり、西隣に位置する徳万頼成遺跡とは24mの標高差がある。遺跡の現況は水田で、昭和50年代半ばに圃場整備が行われたが、それ以前も水田で、近世に芹谷野用水が開削された頃に新田開発されたと考えられる。

今回調査した地区は遺跡の北西部にあたり、標高79.1～78.6mを測る。調査区は「く」の字になっており、折れ曲がることを境に、調査区北側と調査区南側に呼び分ける。検出した遺構は、竪穴建物10棟、掘立柱建物1棟、土坑424基、溝4条、倒木痕4基で、出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、石製品である。帰属時期は、土器の年代から縄文時代中期と古代の2つに分けられる。

## 2 層序 (第9図)

基本層序は、Ⅰ層：黒褐色シルト～粘質シルト、Ⅱ層：黒褐色シルト、Ⅲ層（地山）：にぶい黄橙色粘質土に大別した。Ⅰ層は現耕作土で、ⅠaとⅠbの上下2層に分けられ、このⅠb層にはⅢ層の塊が大量に混入していた。調査区の南側は、ほぼ全面にわたってⅠa層の直下がⅢ層の地山となっており、地山面にキャタピラー痕などが残されていたため、圃場整備の際に地山まで削平されたと考えられる。Ⅱ層からは、縄文時代と古代の遺物が少量ではあるが出土している。調査区の北側では、このⅡ層が厚いところで深さ20cmほど残っていた。調査区壁面の土層観察では、Ⅱ層の上面から掘り込む遺構が確認できたが、Ⅱ層上面での検出は難しく、遺構は地山の上面で検出した。調査区南側で削平を受けつつも、南から北の段丘崖へ向かって、徐々に下がっていく地形である。

## 3 遺構と遺物

### (1) 竪穴建物

建物とした柱穴も含めた土坑の大半は、検出面である地山からの深さが10cm以下と非常に浅く、深さ20cmを越えるものは1割程度である。そのなかでも、比較的深さのある土坑の位置をみていくと、特に土坑が集中する調査区北側で、複数の土坑が楕円状に並んで配置されるような傾向がみられた。遺物の出土量が非常に少ないことともあわせ、これらの土坑の配置は、後世の削平によって、建物の壁や床面、炉などの施設が失われ、柱穴だけが残った竪穴建物であろうと推測した。建物の掘り込みがないため、建物としての平面形や規模は不明だが、柱穴の配置から暫定的な長軸と短軸を計測した。計測値は対となる柱穴の外々距離とした。柱穴から出土した遺物の量は非常に乏しく、小片であったが、周辺からは縄文時代中期前葉から中葉の土器が出土しており、また、4号竪穴建物の柱穴から出土した炭化材を試料とした放射性炭素年代測定で得られた結果も、土器の年代観と同様であったことから、これらの竪穴建物の帰属時期は縄文時代中期前葉から中葉であると考えられる。

## 1号竪穴建物（S I 1, 第10図, 図版6）

調査区北側の竪穴建物群の中で、北東に位置する。柱穴は6本と推定されるが、建物西側の柱穴S P 260とS P 261のいずれかを決めかねたため7本を候補にあげておく。柱穴の配置は長円形で、長軸は北西方向を指す。規模は長軸がS P 247とS P 214で5.0m、短軸はS P 219とS P 246で3.7mを測る。柱穴の埋土は黒褐色シルトを基調とし、地山であるにぶい黄橙色粘質土が混じる。S D 306は柱穴の配置に沿うようにカーブする短い溝で、建物に関連するものの一部の可能性がある。S P 246は、このS D 306を掘削中に検出したもので、新旧関係は不明である。柱穴からは遺物は出土していないが、S I 1周辺のⅡ層から、今回の調査の中で最も多い約100点の縄文土器片が出土している。

## 2号竪穴建物（S I 2, 第11図, 図版6）

調査区北側の竪穴建物群の中で、ほぼ中央に位置し、西側でS I 3と重複している。S I 3の柱穴と重複する柱穴はなく、新旧関係はわからない。柱穴は6本で、配置は長円形、長軸は北西方向を指す。規模は長軸がS P 367とS P 283で4.1m、短軸はS P 313とS P 363で3.0mを測る。S P 284の位置が内側へ偏っており、柱穴の配置がややいびつなものになっている。柱穴の埋土は黒褐色シルトで、地山であるにぶい黄橙色粘質土が混じる。柱穴からは遺物は出土していない。

柱穴で囲まれた空間の中央にある土坑S K 316（第18図）は長軸66cm、短軸50cm、深さ7cmを測る大型のもので、埋土に炭化物は混じらず、土坑の底面や壁面に焼土などの被熱の痕跡はみられなかった。柱穴との位置関係から、貯蔵穴などの屋内施設であった可能性が考えられる。

## 3号竪穴建物（S I 3, 第11図, 図版6）

調査区北側の竪穴建物群の中で、ほぼ中央に位置し、東側でS I 2と重複している。また、S I 3西側でS I 4と、南側でS I 5と近接するため、S I 2・3・4・5はそれぞれ建物の存続時期が異なるが、新旧関係はわからない。柱穴は7本で、配置は長円形、長軸はほぼ北方向を指す。規模は長軸がS P 369とS P 391で3.8m、短軸はS P 361とS P 374で3.1mを測る。柱穴の埋土は黒褐色シルトを基調とし、地山であるにぶい黄橙色粘質土が混じる。S P 391からは、詳細時期の特定できない縄文土器の小片が出土している。

## 4号竪穴建物（S I 4, 第12・19図, 図版6・11）

調査区北側の竪穴建物群の中で、ほぼ中央に位置し、東側でS I 3と近接、南側ではS I 5と大きく重複している。柱穴は6本で、配置は円に近い長円形、長軸は北方向を指す。規模は、長軸がS P 379とS P 386で3.9m、短軸はS P 376とS P 414で3.3mを測る。南側にあるS P 386とS P 382の間隔が短く、北西側は調査区外となっている。柱穴の埋土は黒褐色シルトで、地山であるにぶい黄橙色粘質土と微量の炭化物が混じる。

S P 386からは縄文土器の深鉢口縁部（6）が出土した。図示していないが、6と同一個体である胴部の破片も一緒に少量出土している。また、埋土中に含まれていた炭化材は、放射性炭素年代測定を行い、 $^{14}\text{C}$ 年代で $4455 \pm 20$ 、縄文時代中期前葉から中葉に相当するとの結果を得ている。

## 5号竪穴建物（S I 5, 第11・13図, 図版7）

調査区北側の竪穴建物群の中で、ほぼ中央に位置し、北側でS I 4と大きく重複し、S I 3と近接している。柱穴は8本で、配置は馬蹄形、長軸は北西方向を指す。規模は長軸がS P 346とS P 336の外側の接線とS P 385で4.3m、短軸はS P 354とS P 387で4.2mを測る。南側のS P 346とS P 336の間隔が広がっているが、その他の柱穴はほぼ等間隔で並んでいる。柱穴の埋土は黒褐色シルトで、地山であるにぶい黄橙色粘質土と微量の炭化物が混じる。柱穴からは遺物は出土していない。

柱穴で囲まれた空間の中央にある土坑 S K 351 (第18図) は長軸136cm, 短軸104cmを測る大型のもので、縄文土器 (4・5) と被熱した両拳大ほどの焼け石が複数出土した。焼け石は並べられておらず、焼けている面が揃っているのでもなく、投げ込まれたかのように重なり合っていたため、使用後に投棄されたものと考えられる。また、埋土中には微量の炭化物しか含まれておらず、土坑の壁や底面に焼土などの被熱の痕跡はみられなかった。柱穴との位置から、貯蔵穴などの屋内施設の可能性が高く、建物廃絶時に炉が解体され、炉に使用された石が投棄されたものと考えられる。

#### 6号竪穴建物 (S I 6, 第12図, 図版7)

調査区北側の竪穴建物群の中で、南西に位置する。検出された柱穴は6本であるが、北側の S P 421と S P 430の間が広すぎるため、この間に柱穴が存在していた可能性がある。配置は長円形、長軸は北東方向を指す。規模は長軸が S P 421と S P 436で4.4m, 短軸は S P 424と S P 430で3.8mを測る。柱穴の埋土は黒褐色シルトを基調とし、地山であるにぶい黄橙色粘質土と微量の炭化物が混じる。柱穴からは遺物は出土していない。

#### 7号竪穴建物 (S I 7, 第13・14図, 図版7)

調査区北側の竪穴建物群の中で、南西に位置する。検出された柱穴は5本で、北側の柱穴が不足しているため、全体像を見出すのは難しく、建物があった可能性を述べるにとどめたい。配置は長円形、長軸は北西方向を指すとみられる。規模は、長軸は不明だが、短軸は S P 454と S P 460で3.1mを測る。柱穴の埋土は黒褐色シルトを基調とし、地山であるにぶい黄橙色粘質土、暗褐色シルト、微量の炭化物が混じる。柱穴からは遺物は出土していない。

#### 8号竪穴建物 (S I 8, 第14図, 図版7)

調査区北側の竪穴建物群の中で、南東に位置する。検出された柱穴は6本だが、西側の S P 302と北の S P 204, 南の S P 293との間が広すぎるため、それぞれの間に柱穴が存在していた可能性がある。配置は菱形に近く、長軸は北西方向を指す。規模は長軸が S P 204と S P 293で5.3m, 短軸は S P 199と S P 302で4.8mを測る。柱穴の埋土は黒褐色シルトを基調とし、地山であるにぶい黄橙色粘質土が混じる。柱穴からは遺物は出土していない。

#### 9号竪穴建物 (S I 9, 第15図, 図版8)

調査区北側の竪穴建物群の中で、北東に位置する。柱穴は7本で、配置は細長い五角形、長軸は北西方向を指す。規模は長軸が S P 172と S P 188の外側の接線と S P 184とで4.0m, 短軸は S P 172と S P 188で2.5mを測る。柱穴の埋土は黒褐色シルトを基調とし、地山であるにぶい黄橙色粘質土が混じる。柱穴からは遺物は出土していない。

#### 10号竪穴建物 (S I 10, 第15・21図, 図版8)

調査区北側の竪穴建物群の中で、北東に位置する。調査区外に伸びると考えられ、検出できた柱穴は5本、配置は長方形、長軸は北西方向を指す。規模は現状の長軸が S P 238と S P 468で3.7m以上、短軸は S P 238と S P 259で2.4mを測る。S I 9と短軸や長軸の柱間距離が似ており、S I 9と同様の柱穴配置になる可能性がある。柱穴の埋土は黒褐色シルトを基調とし、地山であるにぶい黄橙色粘質土と暗褐色シルトが混じる。

S P 259から、縄文土器の小片と敲石 (64) が出土している。敲石は角の取れた直方体のような形状の礫で、濃飛流紋岩類、正面左下と側面に敲打痕がある。

## (2) 掘立柱建物

### 1号掘立柱建物 (S B 1, 第16図, 図版8)

調査区南側に位置する。2間×2間の総柱建物で、桁行約6.3m、梁行約5.6m、面積35.28㎡を測る。建物の南西側は調査区外となっており、また、さらに南へ伸びる可能性もあるため、不確定なところは多いが、現状では東西棟とし、主軸方位はN-74°-Eである。柱穴は6基検出している。

遺物はS P 43から縄文土器の小片が出土しているが、混入かと考えられる。調査区南側は、前述したとおり、表土直下が検出面である地山で、さらに地山もかなりの削平を受けているため、遺物の出土は少ない。調査区北側では縄文土器が偏って出土しているが、その他の遺物は8～9世紀代の須恵器と土師器が調査区北側・南側のどちらからも出土している。中世の遺物は出土しておらず、近世の遺物も数点である。このため、この建物の年代は、古代に帰属する可能性をあげておく。

## (3) 土 坑

土坑は424基を検出した。深さがあり、楕円状に並ぶものを竪穴建物の柱穴として抽出したが、深さはあるが並ばなかったもの、大型のもの、遺物が出土したものを中心に述べる。

### 16号土坑 (S K 16, 第17図, 図版8)

調査区南側の東端に位置する。東側が調査区外に広がる不整形の土坑で、底面に帯状に深い部分がある。埋土は黒色シルト、黒褐色シルトで、他の遺構とはやや埋土が異なる。遺物は出土していない。

### 17号土坑 (S K 17, 第17図, 図版8)

調査区南側の南東端に位置する。径が1mに近い円形の土坑で、漏斗状に深くなり、深さ46cmである。遺物は出土していない。

### 154号土坑 (S K 154, 第17図)

調査区北側の北東端に位置する。東側が調査区外に広がる。検出面であるⅢ層の地山よりも上にあるⅡ層中から掘り込まれていることが断面で確認された。埋土は黒褐色シルトで、Ⅱ層とほぼ同質である。遺物は出土していない。

### 189号土坑 (S K 189, 第17図, 図版9)

調査区北側の北東に位置する。長径90cm、短径77cmと大きいですが、深さは14cmと浅い土坑で、縄文土器の深鉢胴部片が出土している。

### 190号土坑 (S K 190, 第17・19図, 図版9・12)

調査区北側の東側に位置する。断面が漏斗状になる土坑で、埋土は黒褐色シルトに炭化物を含む。開口部に近いところから縄文土器(1)が出土した。1は深鉢の胴部で、横位の半隆起線文が施された下部に縦位の半隆起線文が施されている。中期中葉の上山田式か。

### 223号土坑 (S K 223, 第17図)

調査区北側のS I 1の東に位置する。中央が一段深くなる土坑で、埋土は黒褐色シルト、暗褐色シルトに地山であるにぶい黄橙色粘質土が混じる。遺物は出土していない。

### 224号土坑 (S K 224, 第17図, 図版9)

調査区北側のS I 1の東に位置する。中央が一段深くなる土坑で、埋土は黒褐色シルト、暗褐色シルトに地山であるにぶい黄橙色粘質土が混じる。遺物は縄文土器の深鉢胴部片が出土している。

### 230号土坑 (S K 230, 第17図, 図版9)

調査区北側のS I 1の北に位置する。楕円形の南側が一段深くなる土坑で、埋土は黒褐色シルト、

暗褐色シルトににぶい黄橙色粘質土が混じる。拳大で被熱の痕跡のある円礫が出土している。

#### 277号土坑（S K 277, 第17図, 図版9）

調査区北側のS I 2の南に位置する。直径約1mの円形の土坑で、埋土は黒褐色シルトににぶい黄橙色粘質土と微量の炭化物が混じる。遺物は出土していない。

#### 304号土坑（S K 304, 第18・19図, 図版11）

調査区北側のS I 8の西に位置する。楕円形の土坑で、北側が一段深くなる。縄文土器（3）が出土している。3は深鉢の胴部で、縦位と横位、弧状に半隆起線文を施し、半隆起線文間はヘラによる刻みを施している。

#### 308号土坑（S K 308, 第17・19図, 図版9・11）

調査区北側のS I 1の東に位置し、S D 307に切られている。中央が一段深くなる土坑で、埋土は黒褐色シルトににぶい黄橙色粘質土と炭化物が混じる。遺物は縄文土器（2）が出土している。2は深鉢の口縁部で、外面は斜行縄文を施し、内面には隆帯を貼付している。

S K 223・S K 224・S K 308, 後述するS K 230とその周辺のS K 229・S K 231・S K 305は深さのある土坑で、調査区内では竪穴建物の柱穴であると確認することはできなかったが、調査区外の北側に建物がある可能性をあげておきたい。

#### 316号土坑（S K 316, 第18図, 図版6）

調査区北側のS I 2の中央に位置する。楕円形の土坑で、西側が一段深くなり、深さ7cmである。埋土は黒褐色シルトににぶい黄橙色粘質土が混じる。S I 2の項でも述べたとおり、竪穴建物の空間の中央に位置するため、貯蔵穴などの屋内施設の可能性がある。遺物は出土していない。

#### 330号土坑（S K 330, 第18図, 図版9）

調査区北側, S I 10の南に位置する。隅丸方形の土坑で、長径138cm, 短径100cm, 深さ17cmを測る。埋土は黒褐色シルトににぶい黄橙色粘質土が混じる。遺物は出土していない。

#### 351号土坑（S K 351, 第18・19図, 図版7・11）

調査区北側, S I 5の中央に位置する。長径136cm, 短径104cm, 深さ23cmを測る大型の土坑で、埋土は黒褐色シルト, 暗褐色シルトににぶい黄橙色粘質土が混じる。S I 5の項でも述べたとおり、竪穴建物の空間の中央に位置するため、貯蔵穴などの付属施設の可能性がある。遺物は焼け石と縄文土器（4・5）が出土している。4は深鉢の口縁部で、外面は斜行縄文を施す。内外面にはススが付着する。5は深鉢の胴部で、外面は斜行縄文の上に横位の半隆起線文2条を施す。中期中葉の新崎式とみられる。

#### 395号土坑（S K 395, 第18図）

調査区北側, S I 5の南に位置する。長径45cm, 短径36cm, 深さ17cmを測る。縄文土器の深鉢胴部片が出土している。

#### 400号土坑（S K 400, 第6・21図, 図版12）

調査区北側の南に位置する。長径25cm, 短径18cm, 深さ8cmを測る小土坑だが、土師器の甑（60）が出土している。60は口径23.6cm, 口縁部は直立する。9世紀代のものとみられる。

#### 471号土坑（S K 471, 第18図, 図版10）

調査区北側の南に位置する。長さ184cm, 短軸117cmの隅丸方形の土坑で、深さは16cmを測る。S K 472の東側の約半分を切っている。埋土は黒色シルト, 暗褐色シルトににぶい黄橙色粘質土が混じる。遺物は縄文土器の深鉢胴部片, 須恵器片1点, 土師器片1点が出土している。

## 472号土坑 (S K 472, 第18・19・21図, 図版10・11・12)

調査区北側の南に位置する。直径約130cmの円形の土坑で、深さ36cmを測る。S K 472はS K 471によって、東側の約半分を切られている。開口部よりも底面がやや広く、断面でみると壁面が袋状になっており、底面と壁面の土は堅く締まっていた。埋土は黒褐色シルトににぶい黄橙色粘質土と炭化物が混じる。この炭化物に対して放射性炭素年代測定を行ったところ、 $^{14}\text{C}$ 年代では $4475 \pm 20$ 、縄文時代中期前葉から中葉との結果を得た。遺物は縄文土器(7~23)、鉄石英剥片(66)が出土している。

7~22は縄文土器の深鉢で、7~14は口縁部。7は縦位の平行沈線文と楔形刻目文で蓮華状文を表したもの。蓮華状文の下位は横位の半隆起線文で区画しているようである。内面は口唇部の下位に横位の沈線1条を施す。8は半隆起線文2条の上段にのみ爪形文、無文帯の下位に半隆起線文を施す。9は隆帯上に爪形文。10は内外面摩耗しているが、2ヶ所に穿孔がある。11は無文で、頸部に縄文原体を押圧する。12~14は斜行縄文で、いずれも摩耗が激しいが、12は内面にヘラによる沈線を1条巡らせる。14は突起を貼り付け、頸部に縄文原体を押圧する。15~21は胴部。16は縦位の平行沈線文と半裁竹管の刺突で蓮華状文を表し、その下位を半隆起線文3条、無文帯を挟んで半隆起線文。17は隆帯上に両側刻み、半隆起線文の間に楔形刻目文。胎土が緻密な感がある。18は縦位の半隆起線文と隆帯上に爪形文。19は縦位の半隆起線文の間に半裁竹管による波状文を施す。20は半隆起線文の間を斜格子目文で埋める。21は縦位の半隆起線文と斜格子目文、摩耗が激しく不明瞭だが、縦位に鋸歯状の彫り去りを施す。22は底部で、胴部外面は摩耗のため不明瞭だが、底部はスダレ状圧痕がみられる。23は浅鉢。口縁部とh状?の隆帯上に爪形文、口縁部隆帯と胴部の半隆起線文の間は無文で、胴部は半隆起線文の区画内を横位の沈線で埋める。縄文土器の年代は、中期前葉の新崎式新段階から中葉の上山田式古段階におさまるものとみられる。

## (4) 倒木痕 (第20・21図, 図版10)

倒木痕は調査区南側に2基、調査区北側に2基を検出した。南側の2基は直径約2.5m、深さ約40cmの浅いものであった。北側の2基は直径約4m、深さは倒木痕③が約90cm、④が約70cmである。検出時は、南側の2基は土坑の埋土と同じ黒褐色シルトが輪郭を環状に巡り、中央は地山とほぼ同じにぶい黄橙色粘質土であった。北側の倒木痕③と④は北半分が黒褐色シルト、南半分が地山とほぼ同じであるにぶい黄橙色粘質土で、その輪郭を黒褐色シルトが巡っていた。断面をみても、ほぼ同様である。これは南よりの風を受けて、木が北側に倒れた痕と考えられる。遺物は倒木痕③の黒褐色シルトの層から、縄文時代中期前葉~中葉の土器(29・37・39)、磨製石斧(62)が出土しており、包含層からの出土遺物として扱った。

砺波平野に吹く南よりの強風、庄川あらし(庄川ダシ)や井波風は、日本の局地風の一つとして知られている。強風を鎮めるために風神を祀る「不吹堂信仰」が南砺市井波を中心に現在も続けられており、砺波市では、庄川町金屋に「岩黒の不吹堂」(寛政11(1799)年)、庄川町隠尾の隠尾八幡宮境内に「級長戸邊社」(文政3(1820)年)が建立され、信仰の始まりは中世まで遡ると推測されている。今回検出した倒木痕は受けた風の方角が一致するため、この地域特有の南よりの強風によって倒れたものと考えられる。倒れた時期については、縄文時代中期以降としておきたい。

## (5) 包含層出土遺物 (第20・21図, 図版11・12)

包含層からは縄文土器, 土師器, 須恵器, 石製品が出土している。縄文土器は約250点出土したが, 小さな破片で摩滅しているものが多い。出土したのは調査区北側で, S I 1 ~ S I 5・S I 10周辺に集中している。古代の土師器と須恵器は12点で, 調査区北側・南側のどちらからも出土している。

24~53は縄文土器。24~52は深鉢で, 24~33は口縁部。24は突起が欠損している波状口縁で, 口唇部外面に連続爪形文, 横位の半隆起線文と区画内に連続爪形文か。内面にも隆帯を巡らせる。25・26は口縁部を肥大化させ, 三角形の刻みを横位に巡らせるもの。同一個体と考えられる。27~29は口縁部外面に斜行縄文を施したもの。27は口縁部内面に隆帯を貼り付けし, 隆帯上にも斜行縄文を施す。28は面取りした口唇部にも斜行縄文を施す。30は玉状の突起と隆帯を貼り付け, 縄文原体を隆帯の際や下位に押圧したもの。焼成前穿孔が1ヶ所ある。31は突起部。内面に剥離の痕跡がある。32・33は波状口縁で, 口唇部に隆帯, 口縁部外面に沈線文が施されるが, 摩滅が激しく不明瞭。34~47は胴部。34は押引状連続爪形文と半隆起線文を施し, 区画内とみられる上下に楔形刻目文を施す。胎土が赤みのある橙色で緻密な感がある。35は横位の半隆起線文と区画内に楔形刻目文。36は幅広の半隆起線文と押引状連続爪形文。37は半隆起線文の区画内に格子目文。38は斜行縄文を施した後に半隆起線文で区画し, h字状の隆帯を貼り付ける。39も縦横の半隆起線文に区画内は斜行縄文を施す。40・41は半隆起線文や隆帯で, 弧状や渦巻状文を施したもの。42・43は縦横の半隆起線文に, 42は細かな楔形刻目文, 43は斜行縄文を施す。44は斜行縄文を施し, 頸部に縄文原体を押圧する。47は底部に近い部位で, 縦位の半隆起線文が重なる。48~52は底部。48~50は胴部外面に半隆起線文を施す。49・50・52は底面にスタレ状圧痕がみられる。53は台付鉢。包含層出土の縄文土器は, 遺構出土のものと同じく, 縄文時代中期前葉の新崎式新段階から中葉の上山田式古段階のものとみられる。

54~58は須恵器。54は杯Aで, 体部は直線的に開く。底部は回転ヘラ切り後ナデを施す。55・57は杯B。55の体部は直線的に立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。58は杯蓋。54が9世紀代, 55・56が9世紀前半, 57・58が8世紀代のものとみられる。

59は土師器の甕の胴部で, 上半部は内外面カキメ, 下半部は内外面タタキ。9世紀代のもの。

61~63・65は石製品。61は短冊形の打製石斧の基部で, 砂岩製。62・63は磨製石斧で, いずれも透閃石岩製。62は刃部と左側面から裏面に欠損がある。63は刃部のみで, 刃部中央と右側に使用痕が残る。65は黒曜石の剥片である。

## 参考文献

- 砺波市 1990『砺波市史 資料編1 考古 古代・中世』  
 砺波市教育委員会 1987『富山県砺波市梅檀野遺跡群 予備調査概要』  
 砺波市教育委員会 2010『砺波市遺跡詳細分布調査報告6 - 般若・東般若 -』  
 砺波市教育委員会 2010『砺波市遺跡詳細分布調査報告7《報告編》 - 梅檀野・梅檀山 -』  
 砺波市教育委員会 2012『松原遺跡発掘調査報告 - 庄川流域における縄文時代中期中葉の集落遺跡の調査 -』  
 富山県教育委員会 1977『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』  
 庄川町教育委員会 1975『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報』  
 庄川町教育委員会 2001『富山県庄川町松原遺跡』  
 公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2016『徳万頼成遺跡発掘調査報告』  
 小林達雄編 2008『総覧 縄文土器』総覧 縄文土器刊行委員会  
 菟原雄大 2007「富山県・石川県における縄文時代の小型住居について」  
 『堀切遺跡G区発掘調査報告書』黒部市教育委員会  
 笹森健一 2014「堅穴住居の構造」『講座日本の考古学4 縄文時代(下)』  
 古川知明 1996「ロート状ピットを伴う縄文中期堅穴住居跡について - 北陸型特殊ピットの検討 -」  
 『考古学と遺跡の保護 甘粕 健先生退官記念論集』甘粕 健先生退官記念論集刊行会  
 堀沢祐一 2003「富山県内の縄文時代堅穴住居について - 前期から中期にかけて -」  
 『富山市北押川C遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会  
 武藤康弘 2014「縄文時代の大型住居」『講座日本の考古学4 縄文時代(下)』

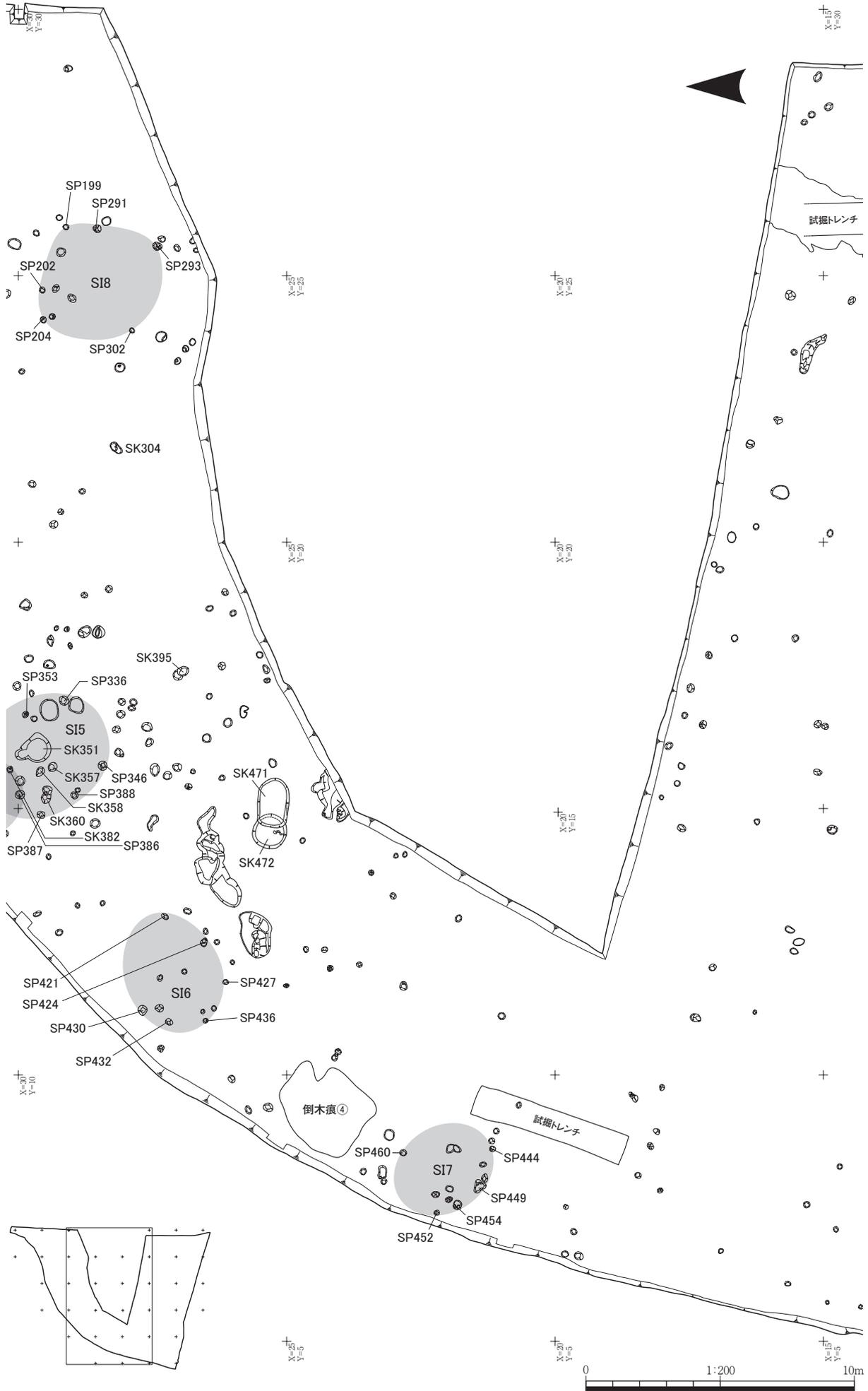


第5図 三合新遺跡 全体図

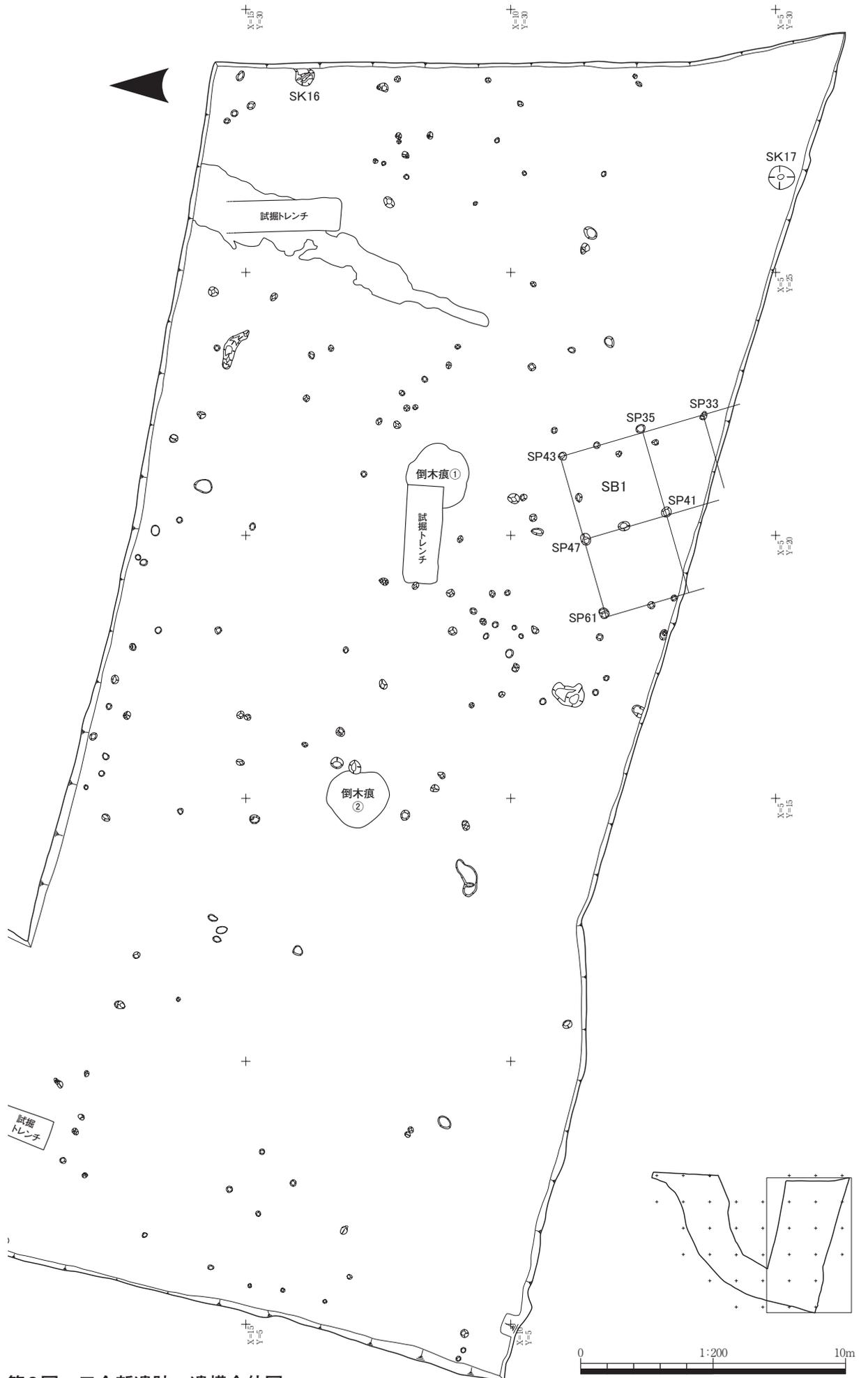


第6図 三合新遺跡 遺構全体図

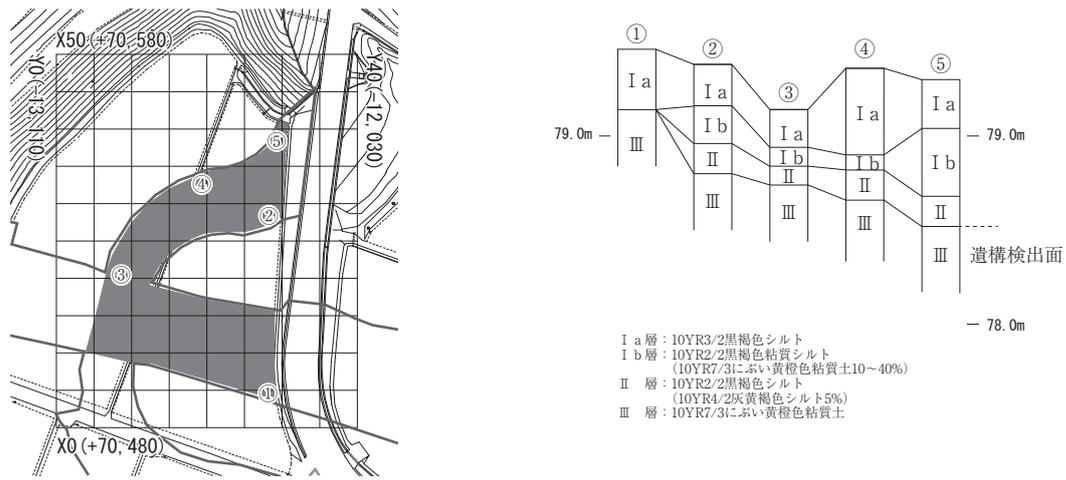
3 遺構と遺物



第7図 三合新遺跡 遺構全体図



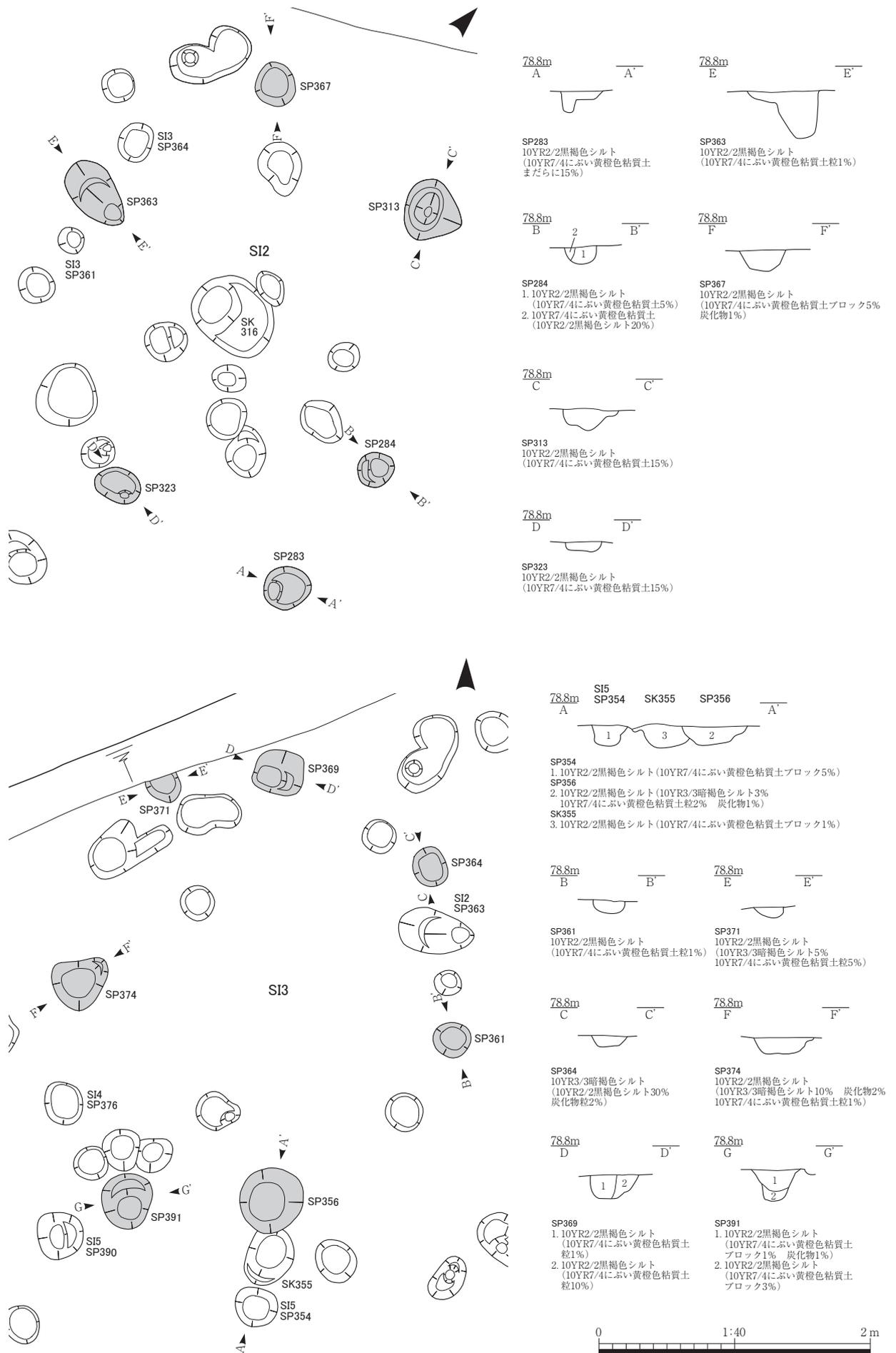
第8図 三合新遺跡 遺構全体図

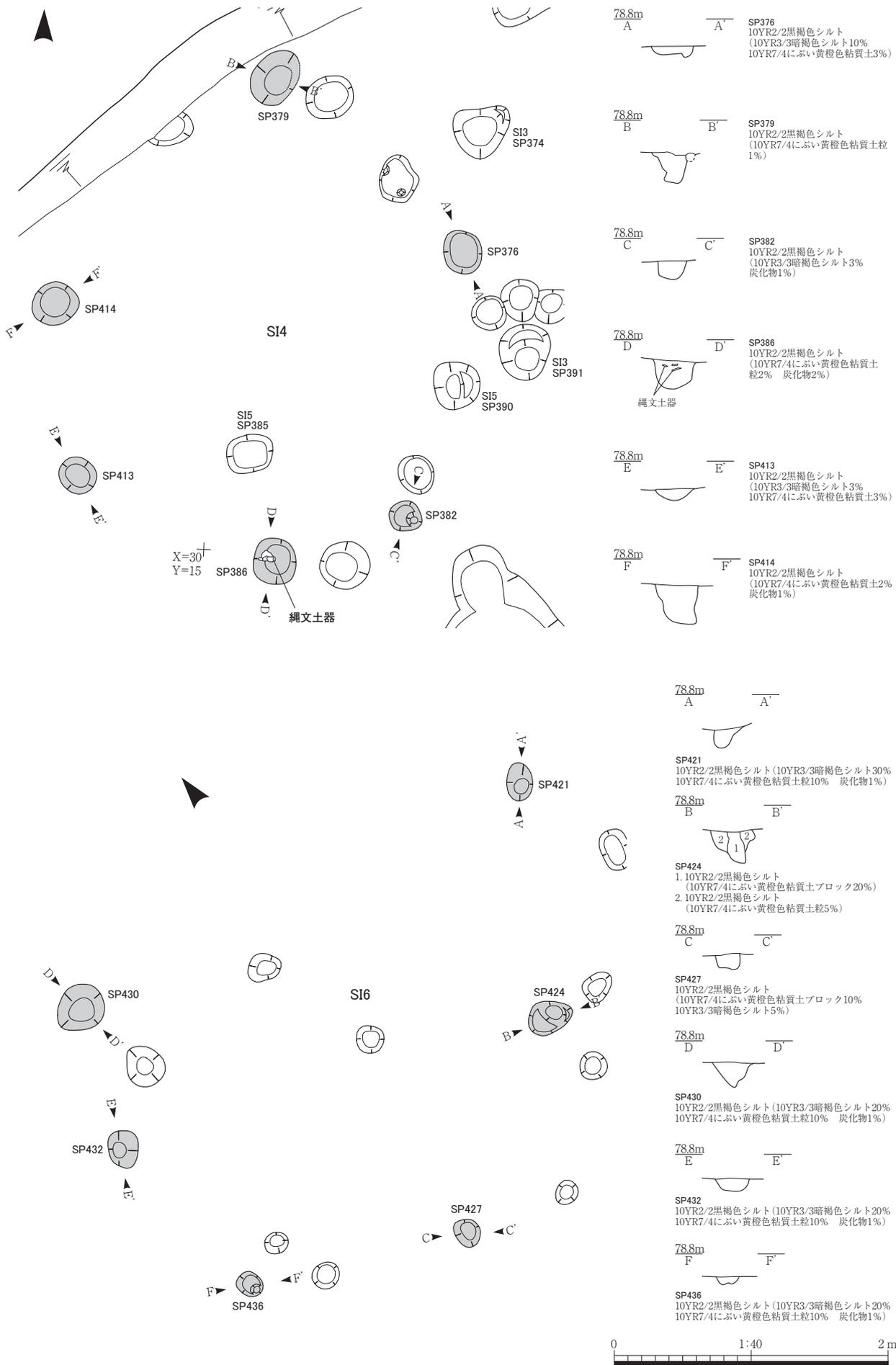


第9図 三合新遺跡 基本層序模式図

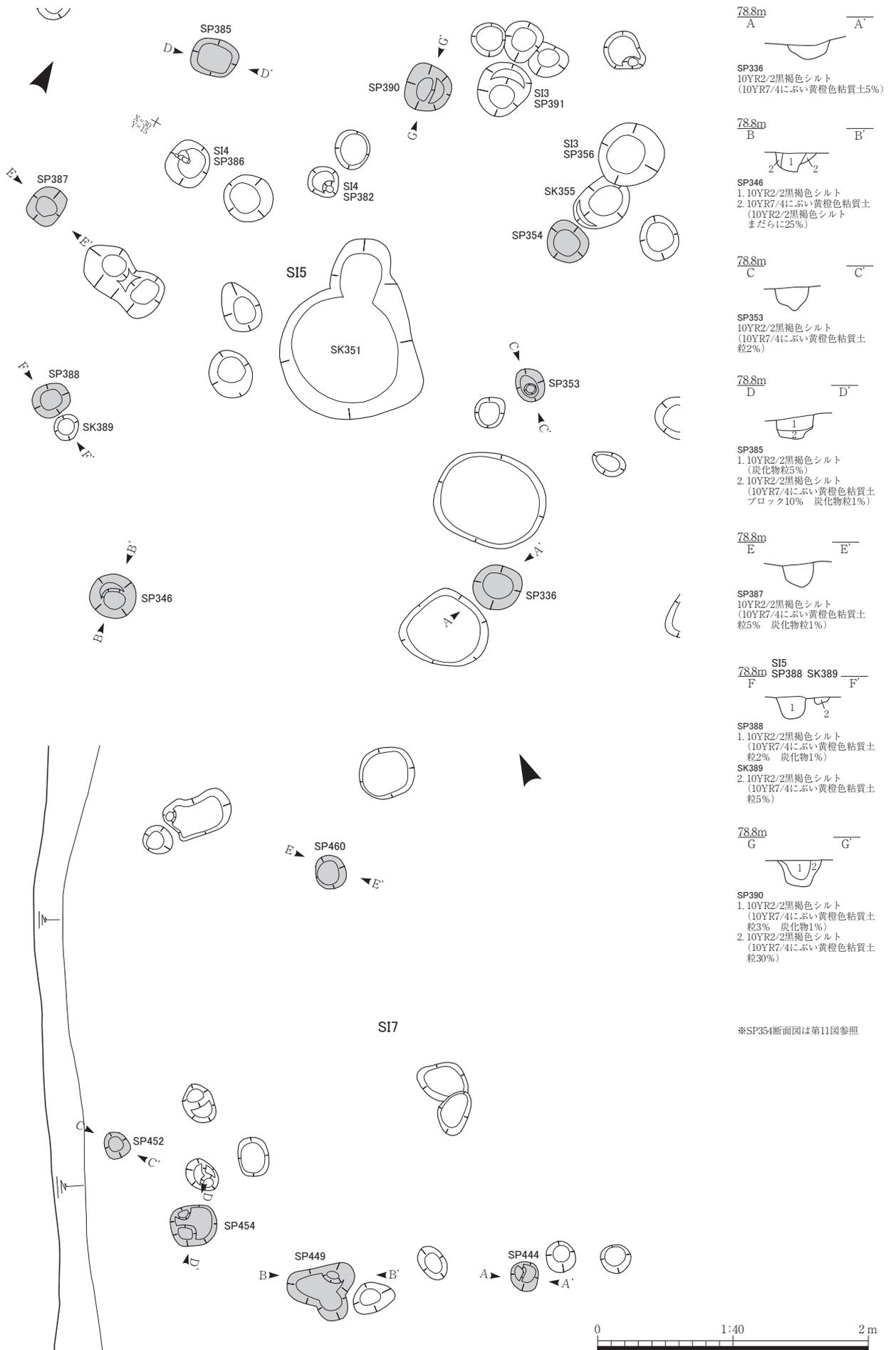


第10図 三合新遺跡 遺構実測図  
SII

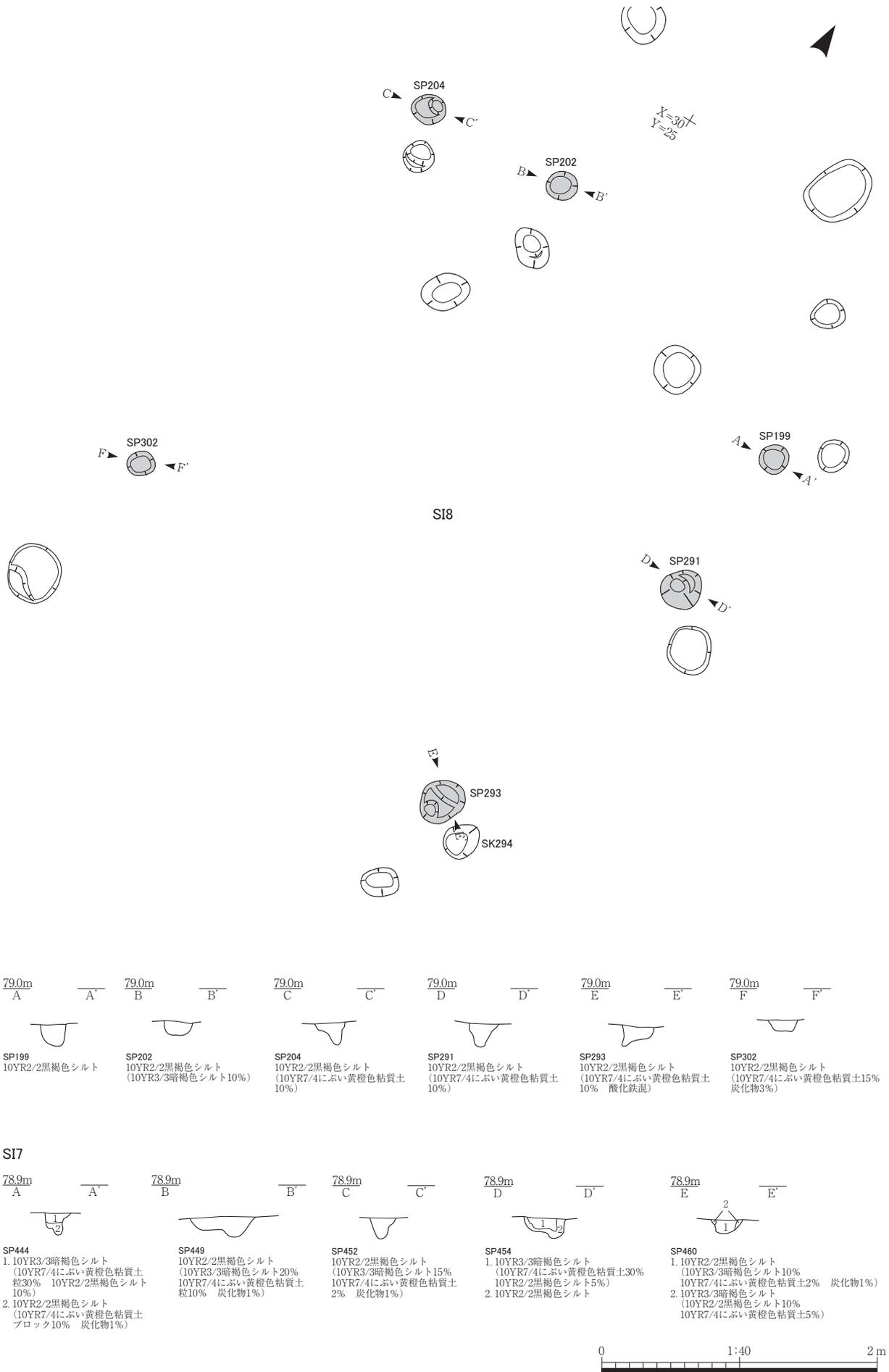




第12図 三合新遺跡 遺構実測図  
SI4 SI6

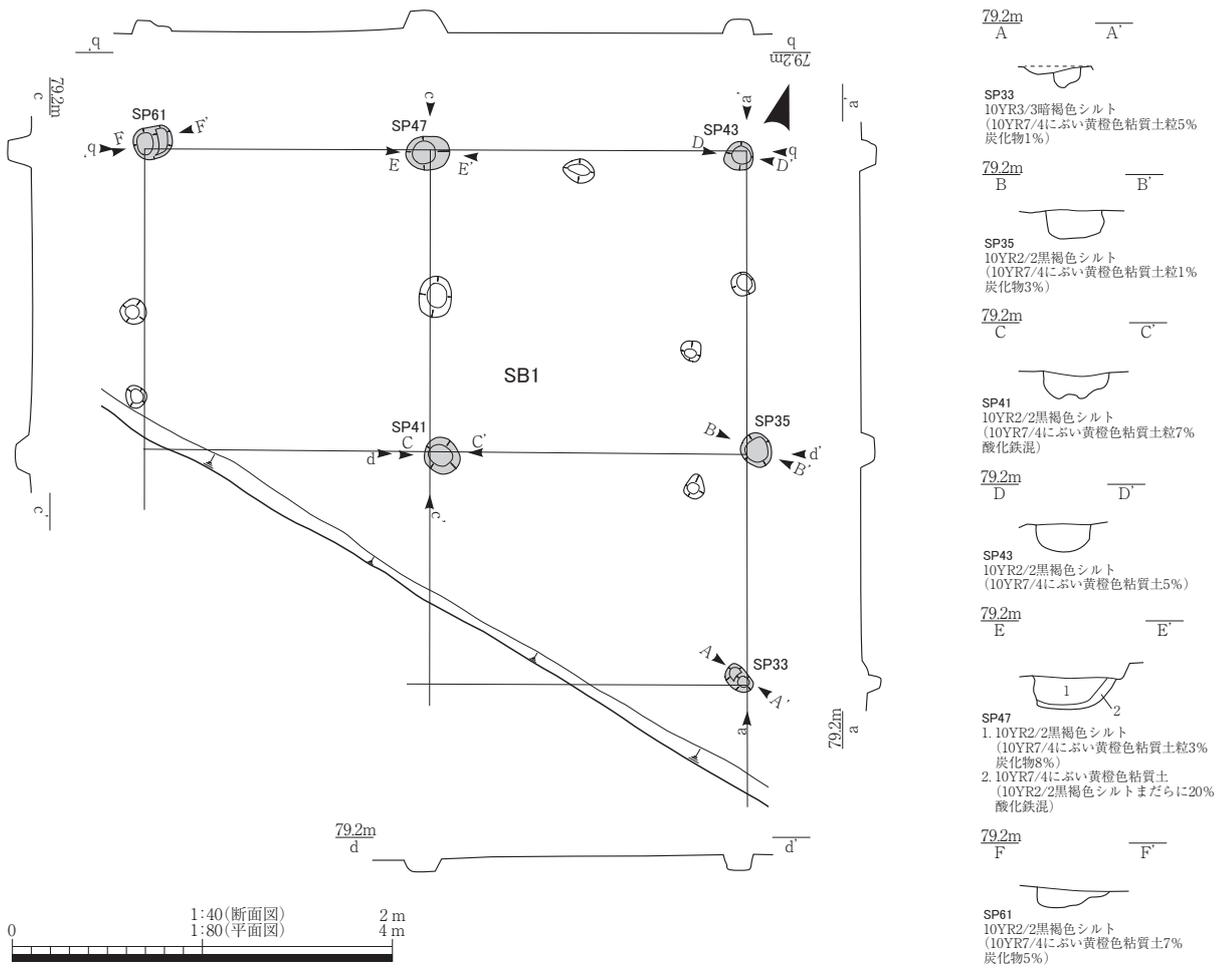


第13図 三合新遺跡 遺構実測図  
SI5 SI7

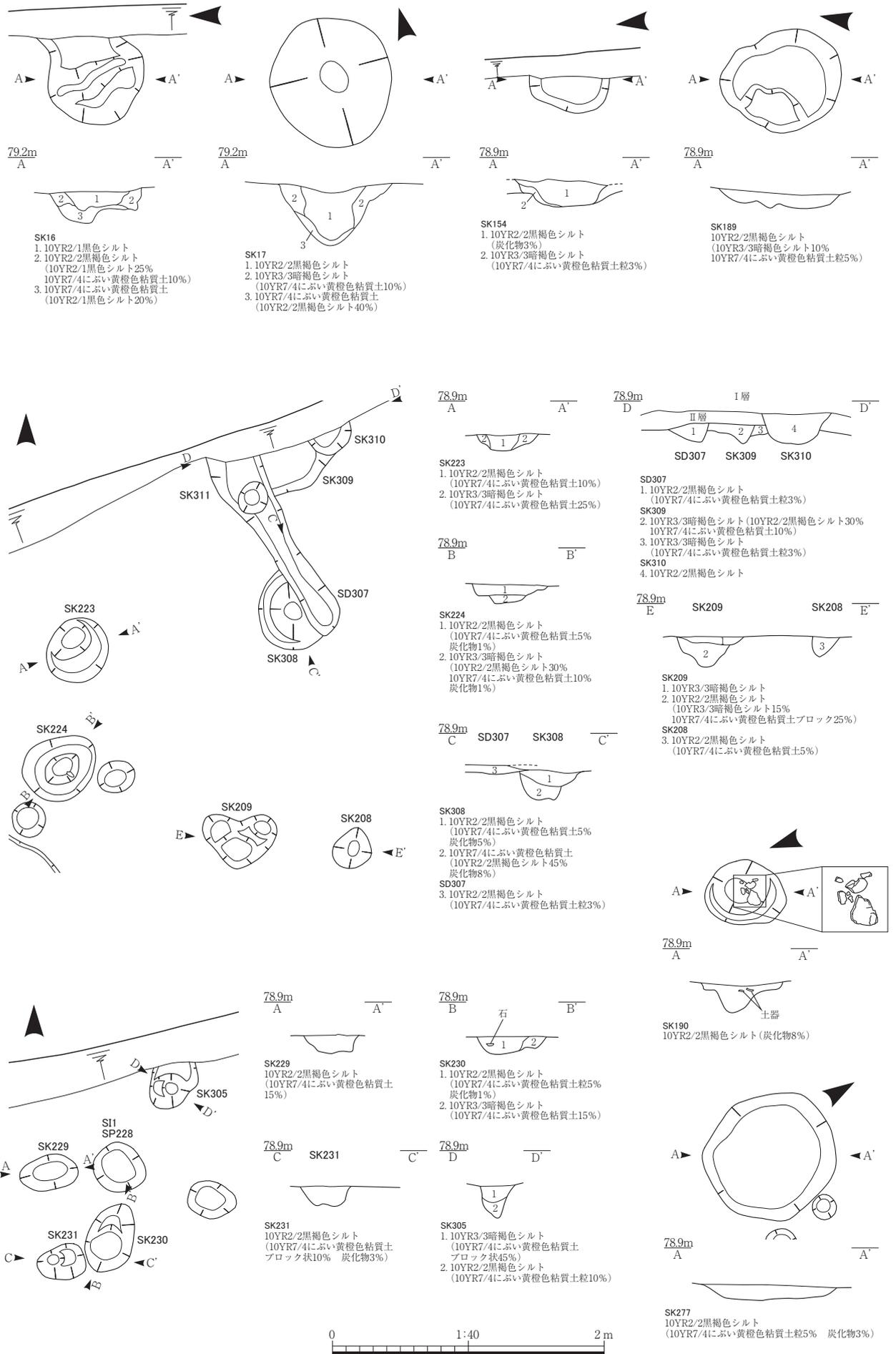


第14図 三合新遺跡 遺構実測図  
SI7 SI8





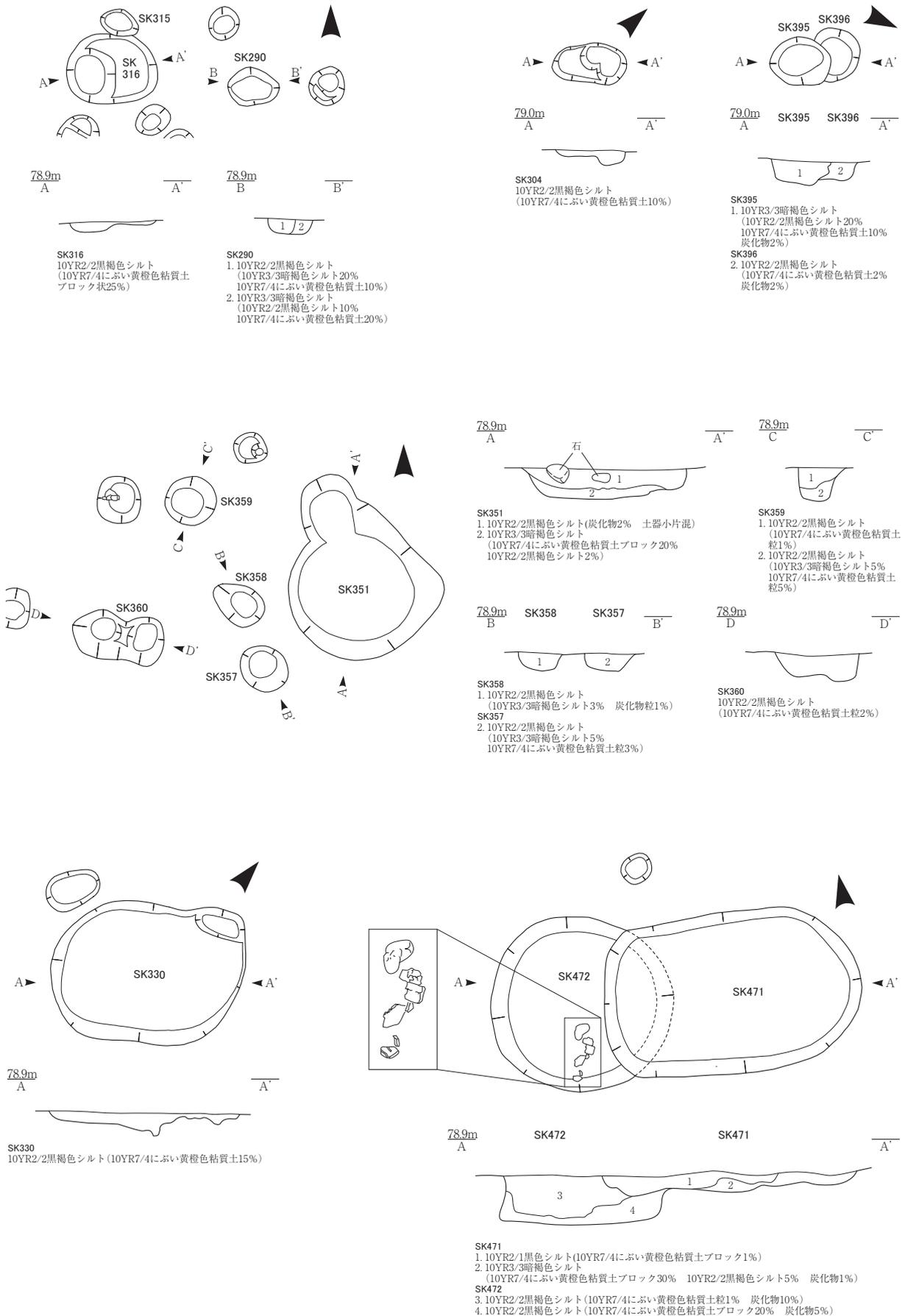
第16図 三合新遺跡 遺構実測図  
SB1



第17図 三合新遺跡 遺構実測図

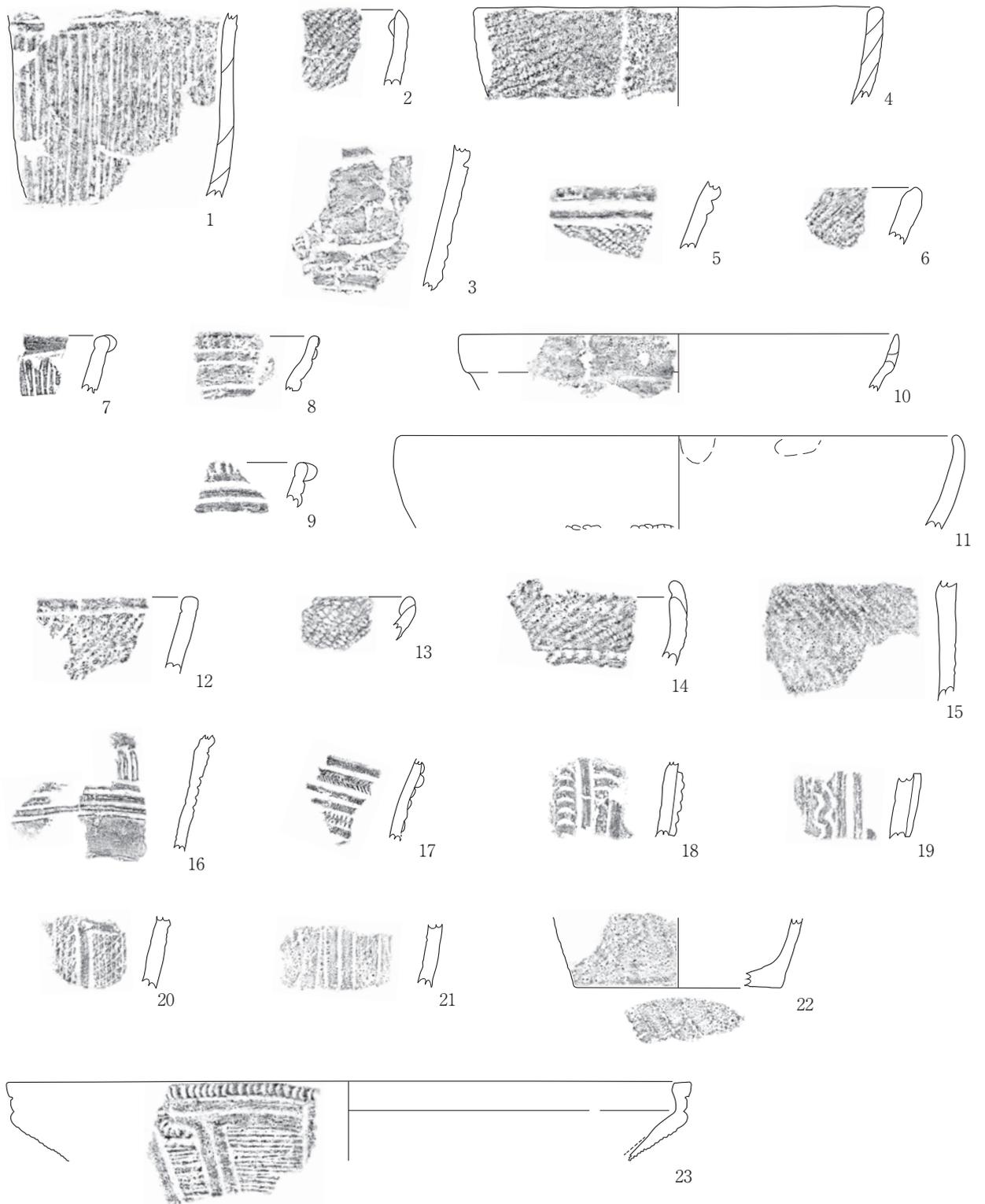
SK16 SK17 SK154 SK189 SK190 SK208 SK209 SK223 SK224 SK229 SK230 SK231  
 SK277 SK305 SD307 SK308 SK309 SK310

3 遺構と遺物



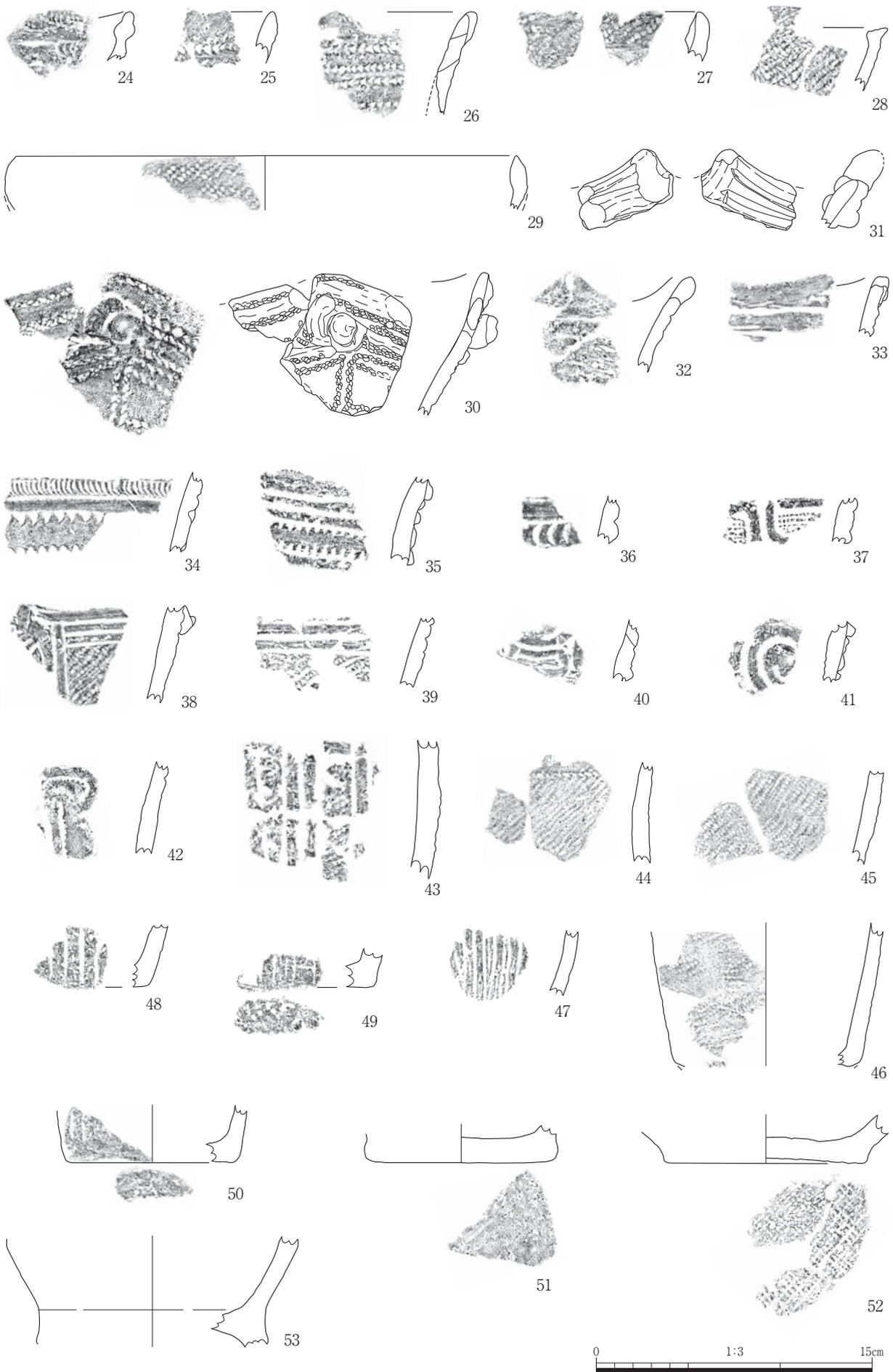
第18図 三合新遺跡 遺構実測図

SK290 SK304 SK316 SK330 SK351 SK357 SK358 SK359 SK360 SK395 SK396 SK471  
SK472

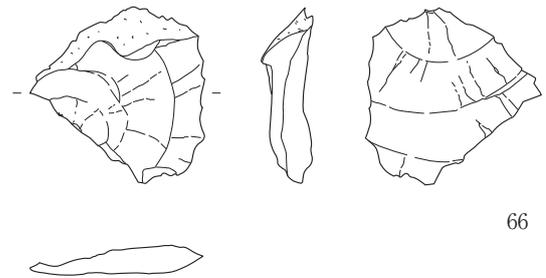
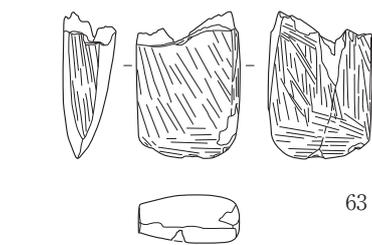
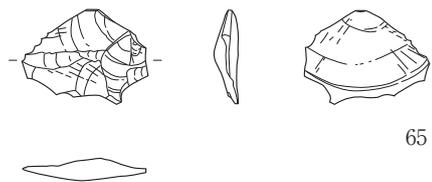
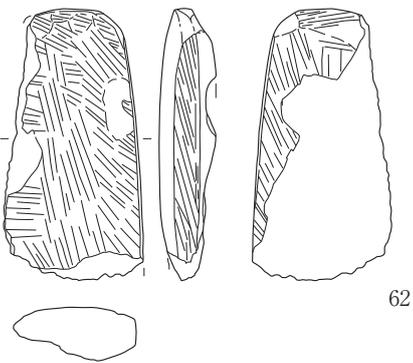
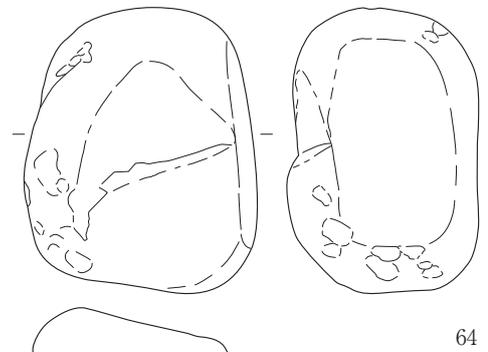
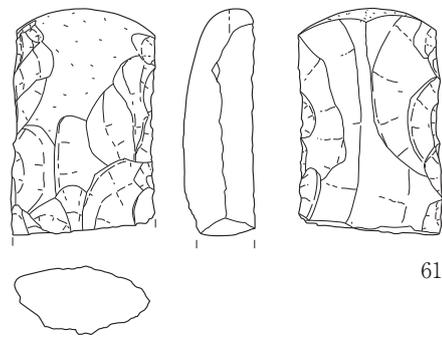
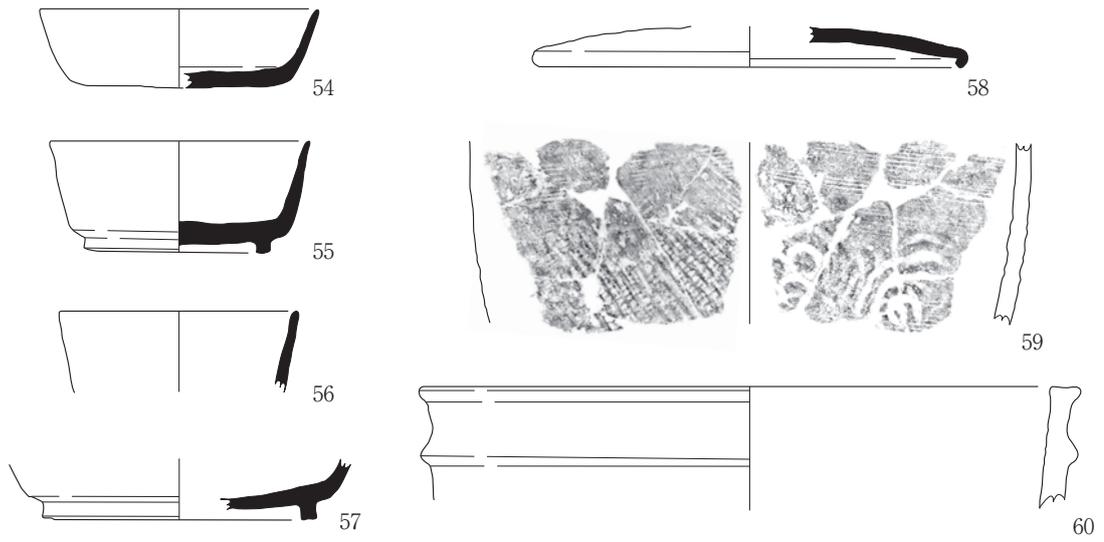


第19図 三合新遺跡 遺物実測図 (1/3)

SK190(1) SK308(2) SK304(3) SK351(4·5) SI4 SP386(6) SK472(7~23)



第20図 三合新遺跡 遺物実測図 (1/3)  
包含層 倒木痕③ (29・37・39)



第21図 三合新遺跡 遺物実測図 (54~64 1/3, 65・66 2/3)  
SK400(60) SI10 SP259(64) SK472(66) 倒木痕③(62) 包含層

第5表 三合新遺跡 竪穴建物一覧

建物 番号	遺構 番号	遺構種類	平面形	規模(m)			切り合い	出土遺物	挿図 番号	図版 番号
				長 (5.0)	幅 (3.7)	深				
SI1	SI1	竪穴建物		(5.0)	(3.7)				10	6
	SP214	柱穴	円	0.34	0.30	0.17			10	
	SP219	柱穴	円	0.39	0.36	0.22			10	
	SP228	柱穴	円	0.38	0.38	0.16			10	
	SP246	柱穴	円	0.28	0.23	0.20			10	6
	SP247	柱穴	楕円	0.38	0.24	0.13			10	
	SP260	柱穴	楕円	0.32	0.22	0.20			10	
SP261	柱穴	楕円	0.30	0.23	0.18			10		
SI2	SI2	竪穴建物		(4.1)	(3.0)				11	6
	SP283	柱穴	円	0.34	0.33	0.17			11	
	SP284	柱穴	円	0.28	0.26	0.12			11	
	SP313	柱穴	円	0.46	0.42	0.16			11	
	SP323	柱穴	楕円	0.34	0.24	0.13			11	
	SP363	柱穴	楕円	0.54	0.32	0.34			11	
	SP367	柱穴	円	0.34	0.30	0.15			11	
SI3	SI3	竪穴建物		(3.8)	(3.1)				11	6
	SP356	柱穴	円	0.49	0.49	0.14	>SK355		11	
	SP361	柱穴	円	0.28	0.26	0.11			11	
	SP364	柱穴	円	0.28	0.22	0.10			11	
	SP369	柱穴	円	0.38	0.33	0.18			11	
	SP371	柱穴	円	0.24	(0.20)	0.12			11	
	SP374	柱穴	円	0.42	0.40	0.12			11	
SP391	柱穴	円	0.42	0.38	0.23		縄文土器	11	6	
SI4	SI4	竪穴建物		(3.9)	(3.3)				12	6
	SP376	柱穴	円	0.34	0.29	0.08			12	
	SP379	柱穴	楕円	0.44	(0.32)	0.22			12	
	SP382	柱穴	円	0.24	0.22	0.14			12	
	SP386	柱穴	円	0.34	0.32	0.22		縄文土器(6)・炭化物	12	6
	SP413	柱穴	円	0.28	0.24	0.08			12	
	SP414	柱穴	円	0.34	0.32	0.28			12	
SI5	SI5	竪穴建物		(4.3)	(4.2)				13	7
	SP336	柱穴	円	0.38	0.34	0.14			13	
	SP346	柱穴	円	0.34	0.32	0.14			13	7
	SP353	柱穴	円	0.26	0.20	0.17			13	
	SP354	柱穴	円	0.32	0.30	0.15			11・13	
	SP385	柱穴	楕円	0.34	0.28	0.18			13	
	SP387	柱穴	円	0.30	0.24	0.17			13	
	SP388	柱穴	円	0.29	0.24	0.16			13	
	SP390	柱穴	円	0.34	0.33	0.19			13	
SI6	SI6	竪穴建物		(4.4)	(3.8)				12	7
	SP421	柱穴	円	0.29	0.20	0.14			12	
	SP424	柱穴	円	0.32	0.26	0.24			12	
	SP427	柱穴	円	0.20	0.19	0.11			12	
	SP430	柱穴	円	0.40	0.34	0.18			12	
	SP432	柱穴	円	0.28	0.24	0.10			12	
	SP436	柱穴	円	0.20	0.16	0.08			12	
SI7	SI7	竪穴建物		-	(3.1)				13・14	7
	SP444	柱穴	円	0.22	0.20	0.16			13・14	7
	SP449	柱穴	不整	0.50	0.42	0.15			13・14	
	SP452	柱穴	円	0.20	0.20	0.15			13・14	
	SP454	柱穴	円	0.36	0.30	0.16			13・14	
	SP460	柱穴	円	0.24	0.22	0.11			13・14	
SI8	SI8	竪穴建物		(5.3)	(4.8)				14	7
	SP199	柱穴	円	0.22	0.20	0.16			14	7
	SP202	柱穴	円	0.22	0.20	0.10			14	
	SP204	柱穴	円	0.24	0.22	0.16			14	
	SP291	柱穴	円	0.30	0.30	0.16			14	
	SP293	柱穴	円	0.36	0.30	0.16			14	
	SP302	柱穴	円	0.20	0.18	0.08			14	
SI9	SI9	竪穴建物		(4.0)	(2.5)				15	8
	SP172	柱穴	円	0.28	0.24	0.18			15	
	SP177	柱穴	円	0.36	0.30	0.14			15	
	SP179	柱穴	円	0.30	0.29	0.16			15	
	SP184	柱穴	楕円	0.24	0.18	0.12			15	
	SP185	柱穴	円	0.32	0.32	0.15			15	
	SP187	柱穴	円	0.26	0.24	0.14			15	
SP188	柱穴	楕円	0.50	0.38	0.16			15	8	
SI10	SI10	竪穴建物		-	(2.4)				15	8
	SP238	柱穴	円	0.42	0.37	0.16	>SK239		15	
	SP259	柱穴	円	0.42	0.33	0.17		縄文土器・敲石(64)	15	8
	SP272	柱穴	楕円	0.44	0.34	0.16		縄文土器	15	
	SP276	柱穴	円	0.80	0.89	0.20	>SK275		15	
	SP468	柱穴	楕円	(1.05)	(0.50)	0.24	>SK467, <SK469		15	

第6表 三合新遺跡 掘立柱建物一覽

建物番号	遺構番号	遺構種類	平面形	規模 (m・㎡)			出土遺物	方位	挿図番号	図版番号
				長	幅	面積 / 深				
SB1	SB1	掘立柱建物		6.3	(5.6)	35.28		N-74°-E	16	8
	SP33	柱穴	楕円	0.34	0.22	0.11			16	
	SP35	柱穴	円	0.34	0.34	0.16			16	8
	SP41	柱穴	円	0.40	0.36	0.14			16	
	SP43	柱穴	円	0.30	0.30	0.14	縄文土器		16	
	SP47	柱穴	楕円	0.46	0.35	0.17			16	
	SP61	柱穴	円	0.42	0.34	0.10			16	

第7表 三合新遺跡 土坑・溝一覽

遺構番号	遺構種類	平面形	規模(m)			切り合い	出土遺物	挿図番号	図版番号
			長	幅	深				
SK16	土坑	不整	0.70	(0.66)	0.23			17	8
SK17	土坑	円	0.96	0.90	0.46			17	8
SK154	土坑	楕円	0.58	0.28	0.20			17	
SK189	土坑	楕円	0.90	0.77	0.14		縄文土器	17	9
SK190	土坑	楕円	0.60	0.48	0.23		縄文土器(1)	17	9
SK208	土坑	円	0.32	0.28	0.15			17	
SK209	土坑	不整	0.52	0.45	0.21			17	
SK223	土坑	円	0.48	0.46	0.11			17	
SK224	土坑	円	0.56	0.48	0.14		縄文土器	17	9
SK229	土坑	楕円	0.43	0.26	0.14			17	
SK230	土坑	楕円	0.54	0.34	0.14			17	9
SK231	土坑	円	0.34	0.26	0.16			17	
SK277	土坑	円	0.98	0.94	0.11			17	9
SK290	土坑	円	0.36	0.28	0.10			18	
SK304	土坑	楕円	0.54	0.30	0.10		縄文土器(3)	18	
SK305	土坑	楕円	(0.42)	0.30	0.26			17	
SD306	溝			0.48	0.06			10	
SD307	溝			0.39	0.14	>SK308, SK309, SK311		17	9
SK308	土坑	円	0.60	(0.34)	0.23	<SD307	縄文土器(2)	17	9
SK309	土坑	不整	(0.52)	(0.32)	0.15	<SD307, SK310	縄文土器	17	
SK310	土坑	円	0.32	(0.18)	0.23	>SK309	縄文土器	17	
SK316	土坑	楕円	0.66	(0.50)	0.07	<SK315		18	6
SK330	土坑	楕円	1.38	1.00	0.17			18	9
SK351	土坑	不整	1.36	1.04	0.23		縄文土器(4・5)・焼石	18	7
SK357	土坑	円	0.36	0.30	0.13			18	
SK358	土坑	楕円	0.40	0.28	0.13			18	
SK359	土坑	円	0.36	0.36	0.24			18	
SK360	土坑	楕円	0.64	0.36	0.20			18	
SK395	土坑	円	0.45	0.36	0.17	>SK396	縄文土器	18	
SK396	土坑	円	0.40	(0.22)	0.12	<SK395		18	
SK400	土坑	円	0.25	0.18	0.08		土師器(60)		
SK471	土坑	円	1.84	1.17	0.16	>SK472	縄文土器・土師器・須恵器	18	10
SK472	土坑	円	1.26	(0.82)	0.36	<SK471	縄文土器(7~23)・剥片(66)・焼成粘土塊・炭化物	18	10

第8表 三合新遺跡 縄文土器一覽 (1)

通図 番号	図版 番号	遺物 番号	遺構番号	X	Y	層	器種	法量(cm)		口径	器高	底径	口唇部	調整・文様・付着物		形態	胎土	色調	備考	
								調整・文様・付着物	調整・文様・付着物											
19	12	1	SK190				深鉢							半隆起縄文(横, 縦 幅6mm) 黒斑	口縁部・胴部・底部 外面	中期 前葉～中葉	長石, 石英, 黒雲母	10YR7/4	にぶい黄褐色	
	11	2	SK308				深鉢							斜行縄文LR	口縁内面塗帯 ヨコナデ	中期 前葉	長石, 石英	10YR6/3	にぶい黄褐色	
		3	SK304				深鉢							半隆起縄文(縦, 横, 弧 幅7mm) 半隆起縄文間刻み(ヘラ工具)	ヨコナデ スス	中期 前葉～中葉	長石, 石英	10YR6/4	にぶい黄褐色	
		4	SK351				深鉢	(200)						斜行縄文LR スス	ミガキ スス	中期 前葉～中葉	長石, 石英	10YR6/4	にぶい黄褐色	
		5	SK351				深鉢							半隆起縄文(幅7.5mm) 斜行縄文LR スス	ヨコナデ	中期 前葉～中葉	長石, 石英	10YR6/3	にぶい黄褐色	
		6	S14 SP386				深鉢							斜行縄文LR	ヨコナデ 黒斑	中期 前葉～中葉	長石, 石英, 黒雲母	10YR7/4	にぶい黄褐色	
		7	SK472				深鉢						隆帯 外面伸長	連華文(縦位半行法縄文 彫形刻目文) 半隆起縄文?	ヨコナデ 沈線	中期 前葉～中葉	長石, 石英	10YR5/4	にぶい黄褐色	
		8	SK472				深鉢						隆帯 外面伸長	半隆起縄文(横, 幅7mm), 連続爪形文(幅7mm)	ミガキ スス	中期 前葉～中葉	長石, 石英, 黒雲母	7.5YR6/4	にぶい褐色	
		9	SK472				深鉢						隆帯 外面伸長 隆帯上連続爪形文	半隆起縄文(横 幅6mm) スス	ヨコナデ	中期 前葉～中葉	長石, 石英, 黒雲母	7.5YR6/6	褐色	
		10	SK472				深鉢	(218)						ヨコナデ? 摩耗 穿孔2ヶ	摩耗	中期 前葉	長石, 石英	10YR7/4	にぶい黄褐色	
		11	SK472				深鉢	(276)						ヨコナデ 縄文原体横位押圧 スス	ヨコナデ 指頭庄痕 黒斑	中期 前葉～中葉	長石, 石英, 黒雲母	10YR5/3	にぶい黄褐色	
		12	SK472・ 銅外痕⑤				深鉢						ナデ 面取状	斜行縄文LR? 摩耗	ヨコナデ 沈線(ヘラ状工具) コゲ	中期 前葉	長石, 石英, 黒雲母	10YR7/4	にぶい黄褐色	
		13	SK472				深鉢						隆帯 内面伸長	斜行縄文LR	ヨコナデ	中期 前葉～中葉	長石, 石英, 黒雲母	10YR6/4	にぶい黄褐色	
		14	SK472				深鉢						突起部貼付 久損摩耗	斜行縄文LR 縄文原体横位押圧	ヨコナデ 摩耗	中期 前葉～中葉	長石, 石英	10YR7/4	にぶい黄褐色	
		15	SK472				深鉢							斜行縄文LR	ヨコナデ スス・コゲ	中期 前葉～中葉	長石, 石英, 黒雲母	10YR6/4	にぶい黄褐色	
		16	SK472				深鉢							半隆起縄文(幅5mm) 連華文(縦位半行法縄文 半截竹管刺突幅5mm)	ヨコナデ	中期 前葉	長石, 石英, 赤色粒	10YR6/4	にぶい黄褐色	
		17	SK472				深鉢							半隆起縄文(幅6mm) 隆帯上向脚刻み 稜形刻目文	ミガキ	中期 前葉	長石, 石英, 赤色粒	7.5YR5/4	にぶい褐色	
		18	SK472				深鉢							隆帯(幅10mm) 連続爪形文 半隆起縄文(縦, 横 幅6mm) 区画内縄文?	ヨコナデ 摩耗	中期 前葉	長石, 石英	10YR5/4	にぶい黄褐色	
		19	SK472				深鉢							半隆起縄文(縦, 波 幅7mm)	ヨコナデ	中期 前葉～中葉	長石, 石英, 赤色粒	10YR6/4	にぶい黄褐色	
		20	SK472				深鉢							半隆起縄文(縦, 横 幅7mm) 斜格子目文(縦→横) スス	スス	中期 前葉	長石, 石英, 黒雲母, 赤色粒	7.5YR6/6	褐色	
		21	SK472				深鉢							半隆起縄文(縦, 弧 幅8mm) 斜格子目文 銅板状彫法? 摩耗	摩耗	中期 前葉	長石, 石英, 黒雲母	7.5YR6/6	褐色	
	12	SK472					深鉢				(10/2)			斜行縄文LR? 摩耗 スタレ庄痕	スス・コゲ	中期 前葉～中葉	長石, 石英	10YR7/4	にぶい黄褐色	
	11	SK472					浅鉢						隆帯 面取 外面伸長 連続爪形文	ヨコナデ 摩耗 区画内側位沈線(ヘラ状工具)	ヨコナデ 摩耗	中期 前葉	長石, 石英	10YR7/3	にぶい黄褐色	



第9表 三合新遺跡 古代土器一覽

挿図 番号	図版 番号	遺物 番号	遺構	出土 地点	層位	種類	器種	法量(cm)			時期	胎土	色調		備考
								口径	器高	底径					
21	12	54		X27Y24	II層	須恵器	杯A	(10.8)	3.1	(7.4)	9世紀代	黒色粒, 白色粒	2.5Y7/2	灰黄色	
		55		X30Y15	II層	須恵器	杯B	10.1	4.4	6.2	9世紀前半	黒色粒, 白色粒	2.5Y7/1	灰白色	
		56		X16Y19	II層	須恵器	杯	(9.2)			9世紀前半	白色粒	2.5Y5/1	黄灰色	
		57		X15Y25	I層	須恵器	杯B			(9.6)	8世紀代	白色粒	2.5Y7/1	灰白色	
		58		X27Y20	II層	須恵器	杯蓋	(16.6)			8世紀代	白色粒	2.5Y6/1	黄灰色	
		59		X28Y19	II層	土師器	甕				9世紀代	石英, 砂粒	10YR8/4	浅黄橙色	外面スス
		60	SK400				土師器	甕	(23.6)			9世紀代	白色粒, 赤色粒, 砂粒	10YR7/4	にぶい 黄橙色

第10表 三合新遺跡 石製品一覽

挿図 番号	図版 番号	遺物 番号	遺構	出土地点	層位	種類	法量(cm・g)				時期	石材	備考
							長	幅	厚	重			
21	12	61		X8Y20	II層	打製石斧	(9.0)	(5.2)	(2.8)	196.47	縄文中期	砂岩	基部のみ
		62		倒木痕③		磨製石斧	(10.7)	(5.5)	(2.3)	185.35	縄文中期	透閃石岩	刃部欠損
		63		X35Y24	I層	磨製石斧	(5.8)	4.1	(2.1)	67.07	縄文中期	透閃石岩	刃部のみ
		64	SI10 SP259			敲石	11.3	9.2	7.5	1135	縄文中期	濃飛流紋岩類	
	12	65		X33Y23	II層	剥片	1.9	2.5	0.5	1.46	縄文中期	黒曜石	
		66	SK472			剥片	3.5	3.4	1.0	7.13	縄文中期	碧玉(鉄石英)	

## 4 総括

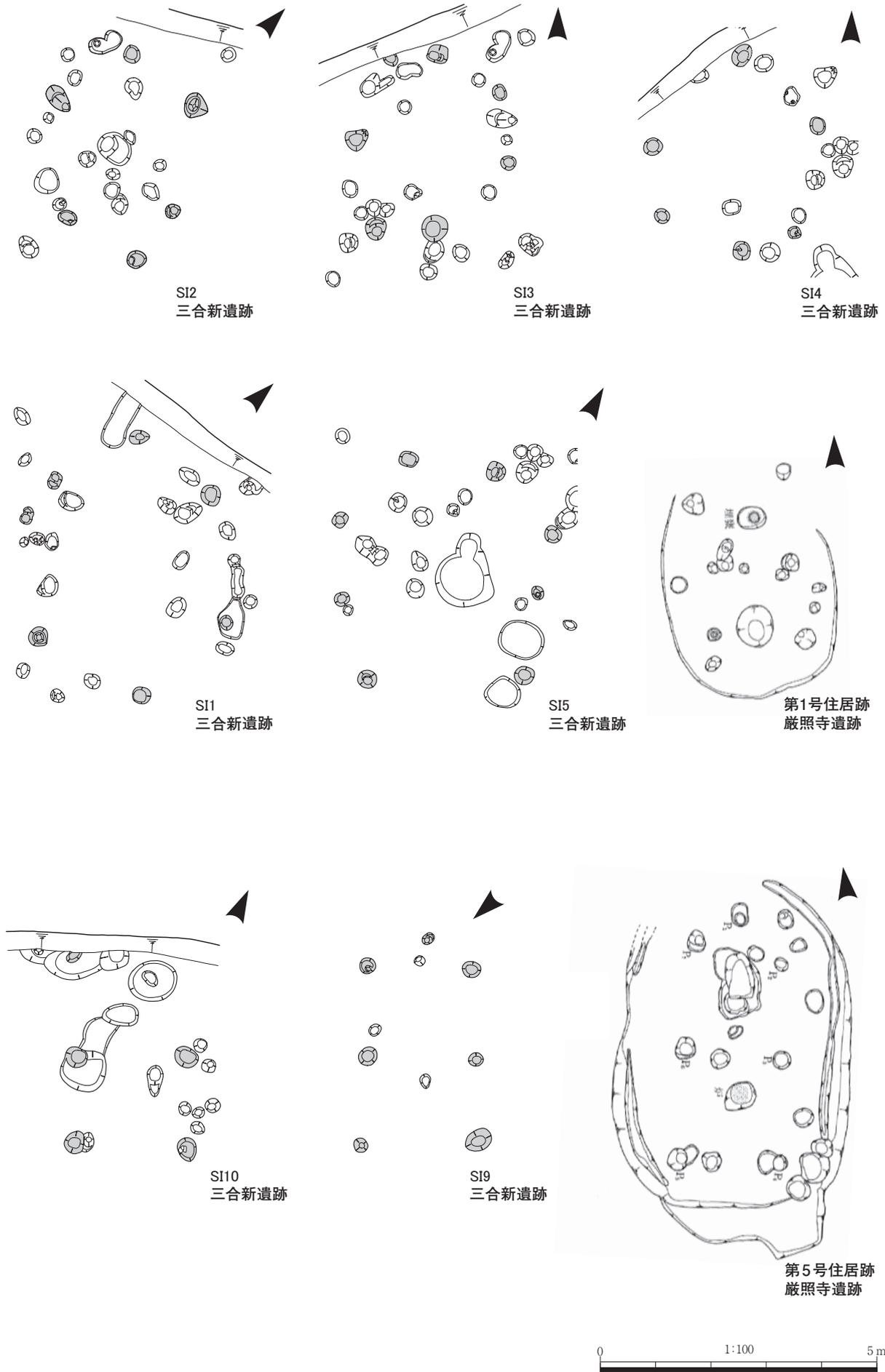
三合新遺跡では、縄文時代中期の竪穴建物10棟、土坑424基、溝4条、倒木痕4基、古代の掘立柱建物を検出し、縄文土器、土師器、須恵器、打製石斧、磨製石斧、剥片が出土した。竪穴建物については、前述したとおり、圃場整備時の削平によって、建物の壁・床・炉などの大方の施設は失われ、柱穴のみを検出した状況で、その柱穴が巡る中央に位置する大型の土坑が貯蔵穴である可能性をあげた。しかし、なにぶんにも、柱穴しかない状況にあっては、得られる情報が少なく、また、どのような建物であったのかを考えるのが難しい。ここでは、近隣で竪穴建物を検出し、三合新遺跡とほぼ同時期の遺跡である巖照寺遺跡と松原遺跡の竪穴建物の状況と比較して、当遺跡の建物について考える手がかりを探りたい。

**巖照寺遺跡**（第22図） 三合新遺跡と同じ芹谷野段丘上には、縄文時代の遺跡が多数存在している。なかでも巖照寺遺跡は芹谷野段丘縁辺部に位置し、三合新遺跡から北に1.4kmほど離れた遺跡である。出土した縄文土器は「巖照寺Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式」として、かつては中期前葉の標式（現在は新保・新崎式に包括）であった。遺構は竪穴建物11棟・埋甕などを検出し、報告では第1号・第5号住居跡の遺構実測図が掲載されているが、他の建物は概略配置図のみのため、この2つの建物を資料とした。

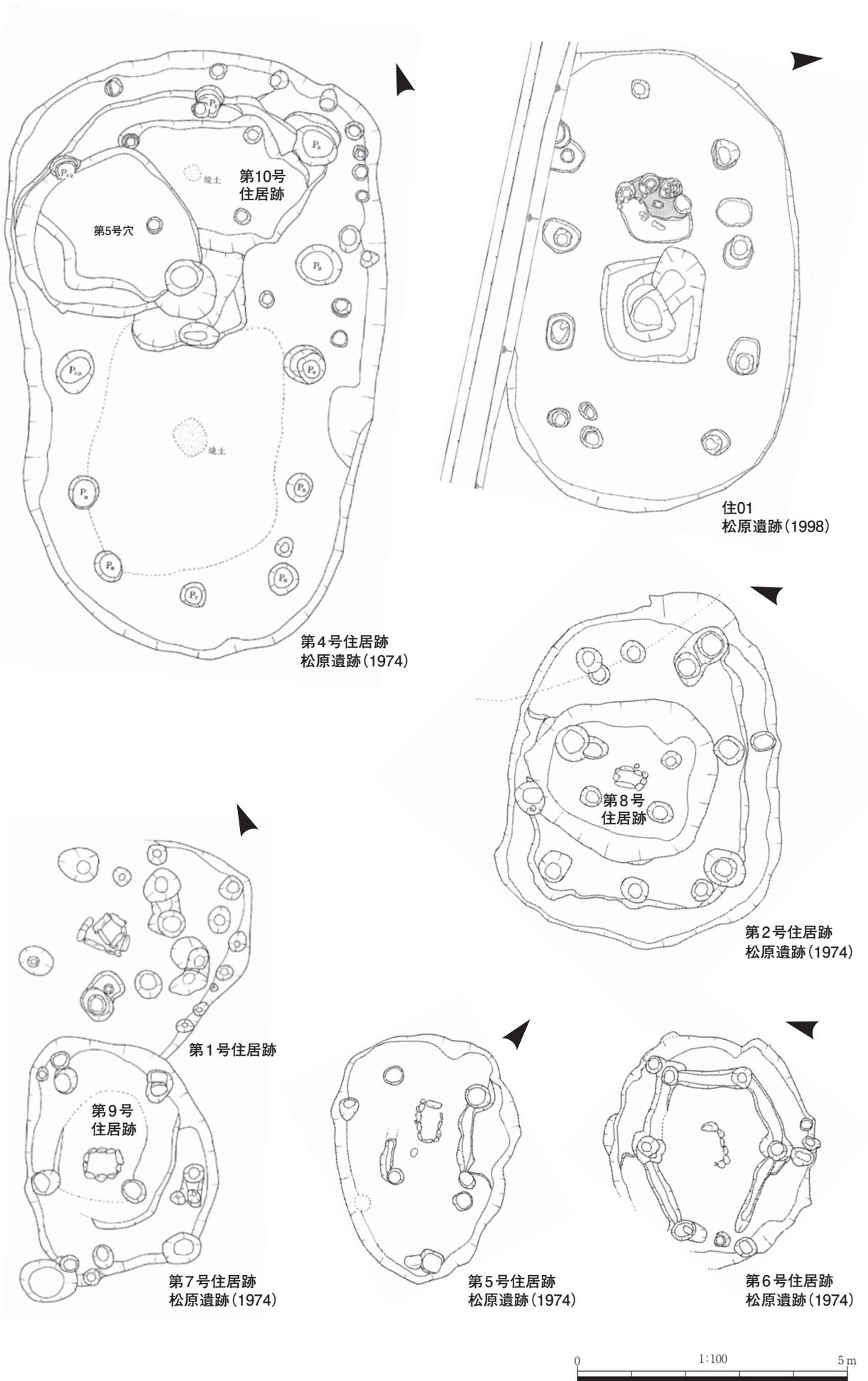
**松原遺跡**（第23図） 砺波平野の大部分を占める庄川扇状地の扇頂部に位置する松原遺跡は、三合新遺跡から南西に7.6kmほど離れた、中期中葉の遺跡である。昭和43（1968）年以降、5回の本調査が行われ、計19棟の竪穴建物の他、炉跡などが検出された。なかでも竪穴建物の平面プランが明確にわかる昭和49（1974）年調査の8棟、平成10（1998）年調査の1棟、計9棟を資料とした。また、昭和49年調査の第4号住居跡と平成10年調査の住01の2棟については、規模が大幅に異なる「大型建物」として取り扱うべきものであるが、参考として掲載した。

三合新遺跡の竪穴建物は10棟あるが、S I 6・7・8については、柱穴が不足するなど、全体像が明確ではないため除外し、建物の呼称については、各報告書の記載に従っている。

まずは柱穴の本数と配置についてみていくことにする。三合新遺跡で柱穴の本数が明らかなのは、S I 1（6～7本）、S I 2（6本）、S I 3（7本）、S I 4（6本～）、S I 5（8本）、S I 9（7本）である。S I 4は北西部分が調査区外となっており、7本になる可能性がある。S I 5は柱穴の配置が馬蹄形で、南側の柱穴の間が他の柱穴の間隔よりも広くなる。S I 9は長方形の短辺に三角形をつけた配置で、同じく柱穴7本であるS I 3が長円形を描くように配置されるのと異なっている。巖照寺遺跡では、第5号住居跡は柱穴7本で長方形+三角形となる。松原遺跡では、第1号住居が柱穴4～5本で方形もしくは五角形、第2号住居跡が柱穴8本で台形、第5号住居跡は柱穴5本で方形+三角形、第6号住居跡は柱穴5本と報告されているが、柱穴間を結ぶ溝の伸びる方向から柱穴6本で六角形、第7号住居跡は第9号住居跡と柱穴が重複し、報告では4～5本とされている。第8・9・10号住居跡は柱穴4本で方形となる。柱穴4本の建物は、三合新遺跡ではみつからなかったが、堀沢氏（2003）・菟原氏（2007）によると、平面形態が方形で小型の建物は中期中葉に盛行し、柱穴4本が主流であるとされている。松原遺跡も中期中葉の遺跡であり、この論と符合している。柱穴6本の建物では、やはり六角形の配置が多いが、松原遺跡の第6号住居跡では長軸を中心にして左右対称に3本ずつ配置され、左右の列の真ん中の柱穴が外へ張り出す樽型の六角形となっており、三合新遺跡のS I 2のように、長軸上の両端にそれぞれ柱穴を配置し、左右対称に2本ずつ配置する六角形とは異なっている。ただ、三合新遺跡では、建物自体の平面形態がわからないのに、左右対称という整った形と



第22図 三合新遺跡 縄文時代中期 竪穴建物集成 1



第23図 三合新遺跡 縄文時代中期 竪穴建物集成2

して見ようとしている前提に誤りがあることは十分に考えられる。柱穴7本の建物では、三合新遺跡のS I 9と巖照寺遺跡の第5号住居跡の柱穴の配置がよく似ており、調査区外に伸びるだろうと推定した三合新遺跡のS I 10も、これに類するのではないかと思われる。以上のことから、柱穴の本数と配置については、三合新遺跡には柱穴6～8本の建物があるが、なかでも柱穴7本の建物のうち、三合新遺跡のS I 9と巖照寺遺跡の第5号住居跡に似ているところがみられたため、建物の平面形態を考えると、S I 9は第5号住居跡のような長円形をしていたことが推測される。

次に、配置された柱穴の長軸の距離を比べる。三合新遺跡では、長軸上にある柱穴同士を結んだ距離でS I 1は4.7m、S I 2は3.7m、S I 3は3.4m、S I 4は3.5m、上の柱穴同士と下の柱穴同士を結んだ線間距離でS I 5は4.0m、下の柱穴同士を結んだ線へ上の柱穴からおろした垂線でS I 9は3.8mとなる。松原遺跡の第2号住居は上下にある柱穴3本の真ん中同士を結んで4.5m、第5号住居跡は上の柱穴同士を結んだ線と下の柱穴からの垂線で3.2m、第6号住居跡は上の柱穴同士と下の柱穴同士を結んだ線間で約3.0m、第7号住居跡は第9号と重複するが、右上・右下の柱穴間で3.2mである。こうしてみると、三合新遺跡ではS I 2・3・4が3.5m前後、松原遺跡では第5・6・7号住居跡が3.0～3.2mとそれぞれ近い数字となり、建物規模が判明している松原遺跡ではこの3棟の規模がよく似ている(4.5・4.25・4.15m)ことから、三合新遺跡の3棟もほぼ同じ規模で、松原遺跡のものと比較して、やや大きめな4.5～5m弱の長軸をもつ建物になるかと推測される。また、4mを越える長軸の建物は各遺跡に1～2棟であったため、推測する手立てが薄いが、巖照寺遺跡、松原遺跡のいずれの建物でも、壁際からやや内側に入ったところに柱穴があるので、三合新遺跡のS I 1で6m前後、S I 5で5.5m前後の長軸の建物になろうかと考えられる。

このように、建物の柱穴本数と配置からは、三合新遺跡S I 9と巖照寺遺跡第5号住居が似ており、建物の平面形態が長円形になるであろうこと、建物の規模を考える点においては、松原遺跡の例から三合新遺跡の建物規模を推定した。この他に、建物内の施設としては、三合新遺跡S I 1で検出した柱穴の配置に沿うような溝S D 306が、松原遺跡第5・6号住居跡の柱穴同士を結ぶ溝と同様の可能性があり、松原遺跡との類似も見出せる。また、松原遺跡では大型建物2棟以外の建物は、ほぼ石組炉をもつが、三合新遺跡ではS I 5の貯蔵穴かと考えられるS K 351から炉に使用されたとみられる焼石が出土しており、中期中葉には定着したとみられる石組炉が存在していたと考えられる。

三合新遺跡の竪穴建物群は、S I 2とS I 3、S I 3・4・5が重複しているため、同時に10棟が建てられていたものではなく、その前後関係はわからないが、建て替えを行って存続していた集落と考えられる。出土量は少ないが、中期前葉から中葉の縄文土器が出土しており、柱穴配置が中期前葉の巖照寺遺跡に似ているS I 9や、中期中葉の松原遺跡の建物内の溝との類似、石組炉の存在の可能性も、その年代観を補強するかに思われる。さらには、建物を建築する技術に似通うものがあるということは、巖照寺遺跡と当遺跡、松原遺跡と当遺跡との間に交流があったということが推測できる。遺跡の範囲からみれば部分的な調査のため、遺跡の全容を解明することはできないが、遺跡の上空から見下ろすと、芹谷野段丘が砺波平野に向かって張り出した縁辺部に立地し、段丘のカーブに沿って、建物群も弧状を描くように見えている。遺された情報が少なく、推測を重ねがちとなってしまったが、今後の資料の増加によって、新たな評価が付け加えられることを期待したい。

註 本文中の参考文献については17頁に一覧を記載した。

# 第Ⅳ章 三合新芹谷遺跡

## 1 概要

三合新芹谷遺跡は、砺波平野の東側にある芹谷野段丘上に位置し、遺跡の東側を流れる和田川に向かい傾斜していく地形となっている。周囲は宅地と水田で、昭和50年代半ばに圃場整備が行われた。

今回調査した地区は遺跡の南西部にあたり、現況は水田で、標高83.5～84.8mを測る。検出した遺構は土坑440基で、遺構からの出土遺物はなく、包含層から須恵器、近世陶磁器、石臼が出土した。

## 2 層序 (第27図)

基本層序は、Ⅰ層：灰黄褐色シルト、Ⅱ層：暗褐色・黒褐色シルト、Ⅲ層：黄褐色粘質土に大別した。Ⅰ層は現耕作土で、第27図の②と③に高低差があるのは、ここで水田の高さに段差がついていることによる。近世陶磁器と石臼が出土している。Ⅱ層は須恵器が1点出土しただけであるが、遺構埋土と大きな違いの見られない土質であった。Ⅲ層は地山で、遺構検出面である。第24図の調査区西側で段差となっているところから東側の等高線84.2mラインまで（第27図の③から④の間にはほぼ相当する）は、圃場整備によって、Ⅱ層とⅢ層が大きく削られて、遺構がほとんど残っていない空白地帯となっていた。84.2mラインから東側はⅢ層が急に傾斜して、東へ下がっていく。また調査区西側の段差から西側は、緩やかに西へ上がっていく。これは旧地形を表しているものと考えられる。

## 3 遺構と遺物

### (1) 土坑

土坑は440基を検出した。直径20～30cmのものが6割、深さでは10～20cmのものが8割を占める。埋土は暗褐色もしくは黒褐色シルトで、ほぼ単層である。三合新遺跡で検出した竪穴建物の柱穴群のように、なんらかの姿が見出せないかと検討したが、難しいものとなった。そのなかで、大型の土坑S K 157とS K 271の2基は、直径に対して深さがあり、壁面が垂直であるという形状から、落とし穴状土坑の可能性があると推測する。これらの土坑も含めて、遺構からは遺物が全く出土しておらず、発掘調査の段階では帰属時期を特定することはできなかったが、遺物整理の段階で、S K 271の埋土第7層から採取した炭化物について放射性炭素年代測定を行い、縄文時代後期前葉から中葉に相当するとの結果を得ることができた<sup>註1</sup>。

#### 157号土坑 (S K 157, 第28図, 図版15)

調査区北西隅に位置する。開口部と底面の平面形は楕円形で、開口部は浅く広がっているが、中央は筒状で、壁面はほぼ垂直に落ち、底面は平坦である。開口部の長径1.5m, 短径1.24m, 筒状の長径0.96m, 短径0.86m, 検出面からの深さは1.65mを測る。調査中での湧水はなかった。埋土は6層に分かれるが、黒色もしくは黒褐色シルトを基調とし、間に地山の土を由来とする褐色粘質シルトの層を挟み、最下層には小礫の混じる崩れやすい粘質シルトが堆積していた。遺物は出土していない。

### 271号土坑（S K 271, 第28図, 図版15）

調査区南東隅に位置する。土坑の一部は調査区外へ広がり、また調査区内に設定した排水溝によって切られている。開口部の平面形は楕円形になるとみられ、底面は円形である。開口部は東側のみが二段になっており、中央は筒状で、壁面はほぼ垂直、底面はややすぼまる形で平坦となる。長径は現存0.98mで、図上から推定すると1.2mほどになるだろう。短径は1.04m、検出面からの深さ1.45mを測る。調査中での湧水はなかった。埋土は9層に分かれるが、暗褐色もしくは黒褐色シルトを基調とし、地山の黄褐色粘質土が混ざる。第7層には炭化物が混在していたため、前述したとおり、放射性炭素年代測定を行って、縄文時代後期前葉から中葉との結果を得ている<sup>註1</sup>。遺物は出土していない。

### （2）包含層出土遺物（第28図）

遺物はI層から近世陶磁器3点、石臼1点、II層から須恵器1点が出土している。須恵器と近世陶磁器はいずれもごく小片で、図示していない。

石臼（1）は凝灰岩製の石臼である。表土を機械掘削中に出土した。上面はほぼ水平で、摩滅して不明瞭ながらも目が判別でき、副溝は7本で、8分画か。下面には幅5mmの鑿痕が残る。

## 4 総括

三合新芹谷遺跡では、土坑440基を検出したが、遺構から遺物は出土せず、S K 271の埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定によって、縄文時代後期前葉から中葉との結果を得た。

土坑のうち、大型で深さのある2基の土坑については、落とし穴状土坑の可能性を推測した。落とし穴状土坑については、富山市野下・新開遺跡、北押川C遺跡、池多東遺跡などで類例があり、集成や考察が行われている。池多東遺跡における日聖氏<sup>註2</sup>、野下・新開遺跡における島田氏<sup>註3</sup>の分類に準じると、当遺跡のものはB類で、開口部から底部にかけて壁が直立するタイプになる。また、落とし穴状土坑の配列については、等高線に平行な例と、垂直な例がある。今回の調査でみつかったのは2基のみであり、論ずることは難しいが、他遺跡の配列を見ていると、土坑の間隔は短くて5m前後、長くて15m前後であり、離れていても20m以下のようなものである。当遺跡の2基は30m離れており、一列上に並ぶ可能性は薄いように思われる<sup>註4</sup>。なお、一列に並んだ土坑の個々の配置については、列の軸に対して、土坑の平面形が横長になることが共通性としてあげられている。これに照らし合わせると、当遺跡の2基はいずれも等高線に沿って横長になっており、配列の方向は等高線に対して垂直となる可能性がある。遺跡の東側を流れる和田川へと下る獣道に設置されたものの一つであろうか。

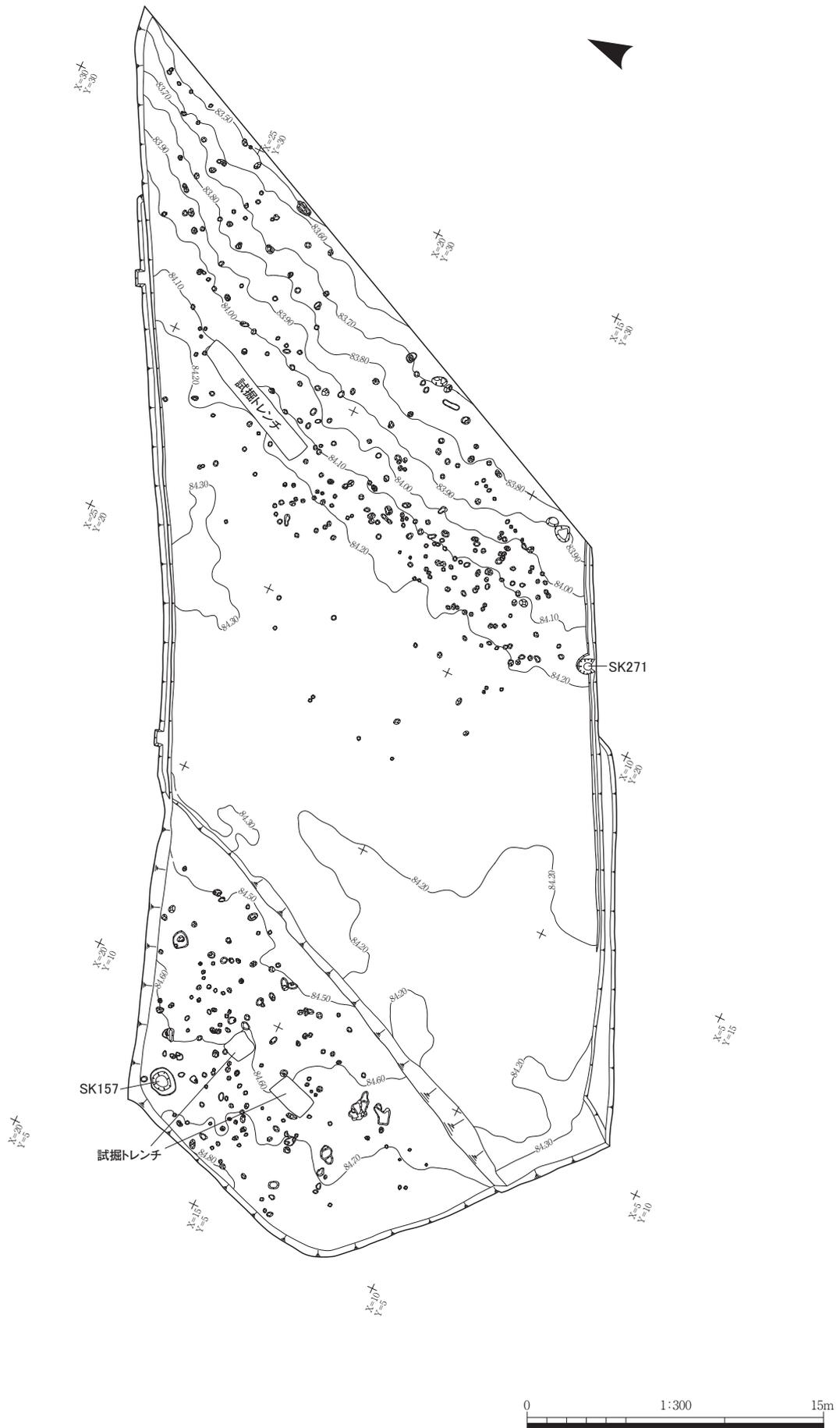
遺構の帰属年代は、放射性炭素年代測定によって、縄文時代後期前葉から中葉との結果を得ることができた。砺波市域では、増山遺跡から後期前葉の土器、孫子ワバラ遺跡から後期中葉の土器が出土しているほかは、東別所貉が城遺跡と中尾遺跡から後晩期の石器がみついているくらいで、後期の遺跡は少ない。当時の人々がどこに居住し、どのように暮らしていたかについて、今回の調査では、芹谷野段丘上にわずかな痕跡をみつけ得たと述べるにとどめて、今後の資料の増加に期待したい。

註

- 註1 詳しくは「第V章 自然科学分析」を参照されたい。
- 註2 日聖祐輔 2009「落し穴状遺構について」『富山市北押川B遺跡・北押川C遺跡・池多東遺跡発掘調査報告書 - 呉羽南部企業団地開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4) -』富山市教育委員会
- 註3 島田亮仁 2016「縄文時代の遺構について」『野下・新開遺跡発掘調査報告 - 主要地方道小杉婦中線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘報告II -』(公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 註4 S K157とS K271の間には遺構が削平された空白地帯を含むが、土坑の深さを考えると、間に同様の遺構が存在することはない。

参考文献

- 砺波市 1990『砺波市史 資料編1 考古 古代・中世』
- 砺波市教育委員会 1987『富山県砺波市梅檀野遺跡群 予備調査概要』
- 砺波市教育委員会 2010『砺波市遺跡詳細分布調査報告6 - 般若・東般若 -』
- 砺波市教育委員会 2010『砺波市遺跡詳細分布調査報告7《報告編》 - 梅檀野・梅檀山 -』
- 公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2016  
『野下・新開遺跡発掘調査報告 - 主要地方道小杉婦中線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘報告II -』
- 富山市教育委員会 2008『富山市北押川C遺跡・御坊山遺跡発掘調査報告書 - 呉羽南部企業団地開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(3) -』
- 富山市教育委員会 2009『富山市北押川B遺跡・北押川C遺跡・池多東遺跡発掘調査報告書 - 呉羽南部企業団地開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4) -』
- 今村啓爾 1983「陥穴(おとし穴)」『縄文文化の研究2 生業』雄山閣
- 佐藤宏之 1999「遺構研究 陥し穴」『縄文時代 第10号』縄文時代文化研究会



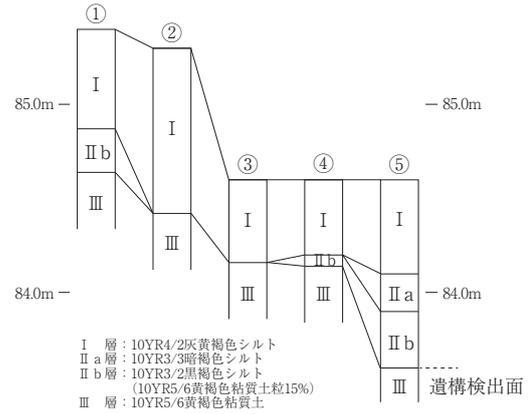
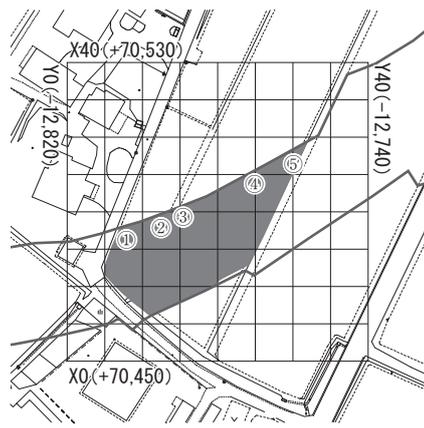
第24図 三合新芹谷遺跡 全体図



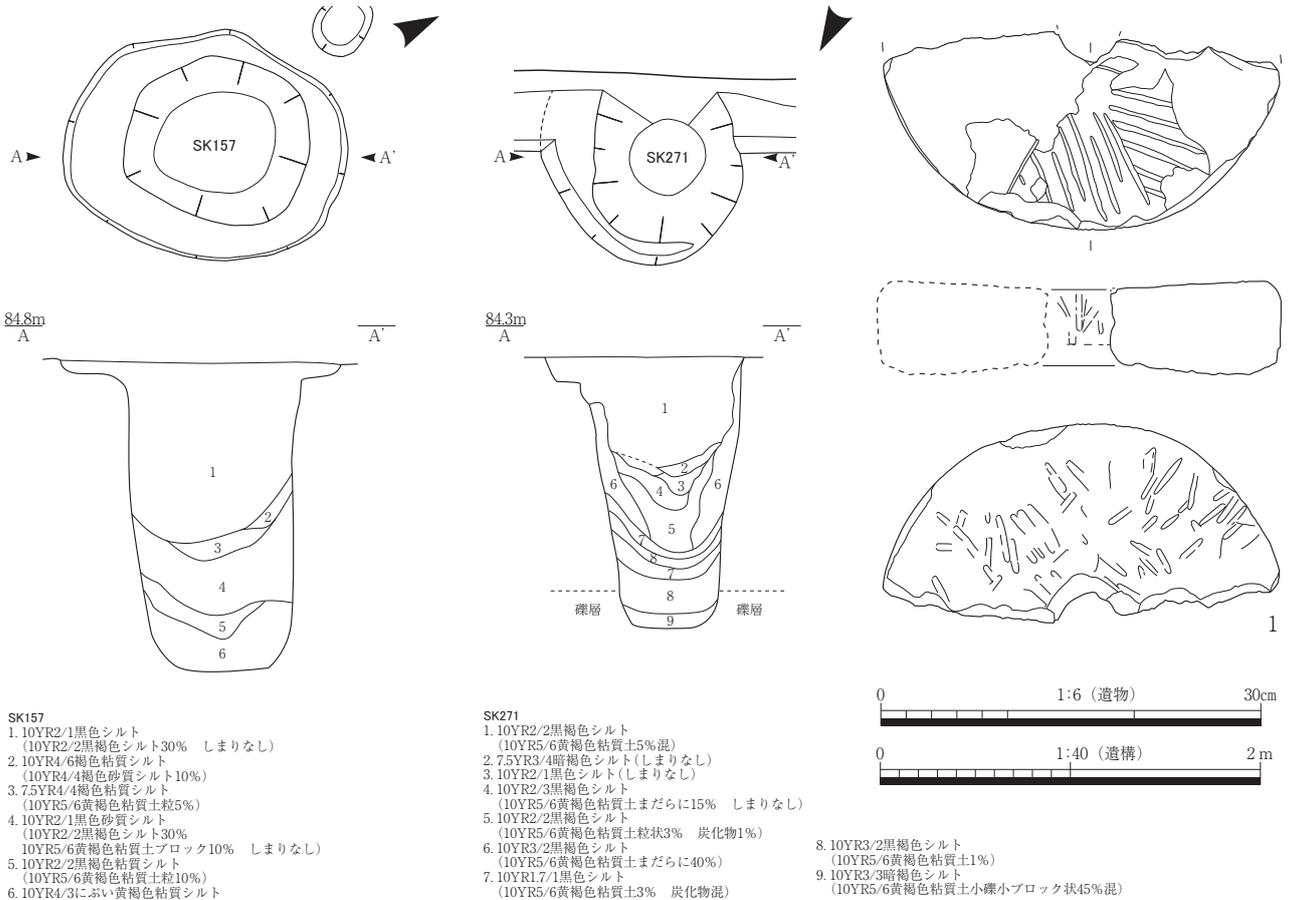
第25図 三合新芹谷遺跡 遺構全体図



第26図 三合新芹谷遺跡 遺構全体図



第27図 三合新芹谷遺跡 基本層序模式図



第28図 三合新芹谷遺跡 遺構・遺物実測図

第11表 三合新芹谷遺跡 土坑一覧

遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	時期	備考	挿図番号	図版番号
		長	幅	深					
SK157	楕円	1.50	1.24	1.65		縄文時代後期前葉～中葉か	落とし穴状土坑か	28	15
SK271	楕円	(0.98)	1.04	1.45		縄文時代後期前葉～中葉か	落とし穴状土坑か	28	15

第12表 三合新芹谷遺跡 石製品一覧

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺構	出土地点	層位	種類	法量(cm・g)				石材	時期	備考
							長	幅	厚	重			
28		1		X10Y10	I	石臼(下臼)	(31.1)	(15.7)	7.9	5003	凝灰岩	近世以降	復元径32cm

# 第V章 自然科学分析

## 1 放射性炭素年代測定

### (1) はじめに

砺波市三合新に所在する三合新遺跡，および同市三合新・芹谷に所在する三合新芹谷遺跡より検出された試料について，加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定を行った。

### (2) 試料と方法

測定試料の情報，調製データは第13表のとおりである。試料No.7（PLD-31818）は，三合新遺跡の土坑S K472より出土した炭化材である。試料No.8（PLD-31819）は，三合新遺跡の竪穴建物S I 4の柱穴S P386より出土した炭化材である。炭化材は，両者とも最終形成年輪が残っていなかった。試料No.9（PLD-31820）は，三合新芹谷遺跡の土坑S K271の7層より出土した炭化したイネ科の稈である。

第13表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-31818	試料No.7 遺跡：三合新遺跡 出土遺構：S K472 遺構種類：土坑	種類：炭化材 試料の性状： 最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N， 水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）
PLD-31819	試料No.8 遺跡：三合新遺跡 出土遺構：S P386(S I 4) 遺構種類：竪穴建物柱穴	種類：炭化材 試料の性状： 最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N， 水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）
PLD-31820	試料No.9 遺跡：三合新芹谷遺跡 出土遺構：S K271 遺構種類：土坑 出土層位：7層	種類：炭化物 （草本(イネ科)） 部位：稈 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N， 水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，<sup>14</sup>C年代，暦年代を算出した。

### (3) 結果

第14表に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代を，第29図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はA D1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には，<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、および半減期の違い（ $^{14}\text{C}$ の半減期 $5730 \pm 40$ 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正にはOxCal4.2（較正曲線データ: IntCal13）を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第14表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 暦年代範囲	$2\sigma$ 暦年代範囲
PLD-31818	$-27.71 \pm 0.20$	$4474 \pm 22$	$4475 \pm 20$	3326-3232 cal BC (49.6%) 3224-3220 cal BC ( 1.5%) 3173-3161 cal BC ( 5.7%) 3119-3096 cal BC (11.4%)	3336-3211 cal BC (59.2%) 3193-3151 cal BC (13.5%) 3139-3087 cal BC (18.3%) 3059-3030 cal BC ( 4.4%)
PLD-31819	$-27.42 \pm 0.18$	$4454 \pm 22$	$4455 \pm 20$	3315-3294 cal BC ( 9.2%) 3288-3274 cal BC ( 6.2%) 3266-3238 cal BC (18.6%) 3110-3084 cal BC (14.5%) 3065-3028 cal BC (19.7%)	3330-3216 cal BC (46.3%) 3184-3157 cal BC ( 6.0%) 3126-3022 cal BC (43.1%)
PLD-31820	$-13.31 \pm 0.24$	$3587 \pm 21$	$3585 \pm 20$	1961-1899 cal BC (68.2%)	2018-1995 cal BC ( 9.3%) 1981-1887 cal BC (86.1%)

#### (4) 考 察

以下、 $^{14}\text{C}$ 年代および $2\sigma$ 暦年代範囲（確率95.4%）に基づいて結果を整理する。なお、縄文土器編年と $^{14}\text{C}$ 年代や暦年代の対応関係については、小林（2008）、工藤（2012）、加藤（2008）、小島（2008）、狩野（2008）を参照した。

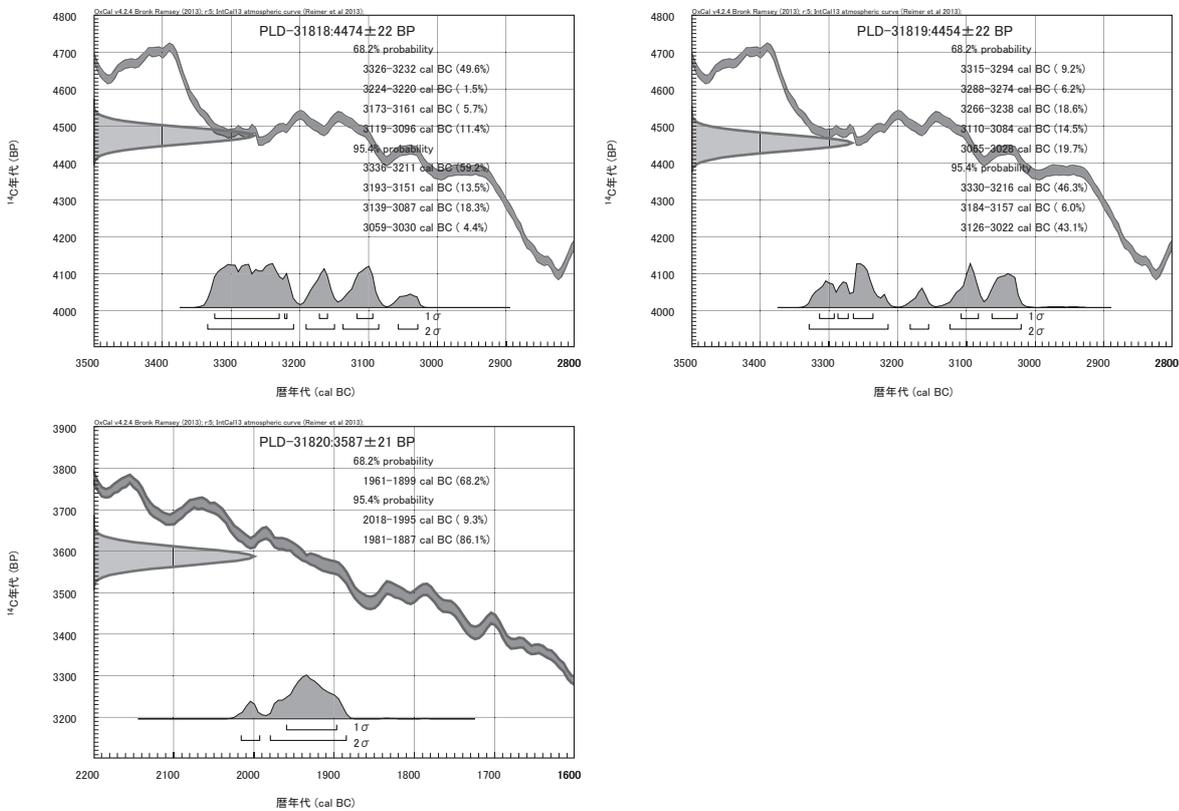
三合新遺跡の土坑S K 472より出土した炭化材（PLD-31818）は、 $^{14}\text{C}$ 年代が $4475 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$ 暦年代範囲が3336-3211 cal BC (59.2%)、3193-3151 cal BC (13.5%)、3139-3087 cal BC (18.3%)、3059-3030 cal BC (4.4%)であった。同遺跡の竪穴建物S I 4 柱穴S P 386より出土した炭化材（PLD-31819）は、 $^{14}\text{C}$ 年代が $4455 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$ 暦年代範囲が3330-3216 cal BC (46.3%)、3184-3157 cal BC (6.0%)、3126-3022 cal BC (43.1%)であった。両者は、縄文時代中期前葉～中葉に相当する。

三合新芹谷遺跡の土坑S K 271より出土した炭化したイネ科稈（試料No. 9：PLD-31820）は、 $^{14}\text{C}$ 年代が $3585 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$ 暦年代範囲が2018-1995 cal BC (9.3%) および1981-1887 cal BC (86.1%)であった。これは、縄文時代後期前葉～中葉に相当する。

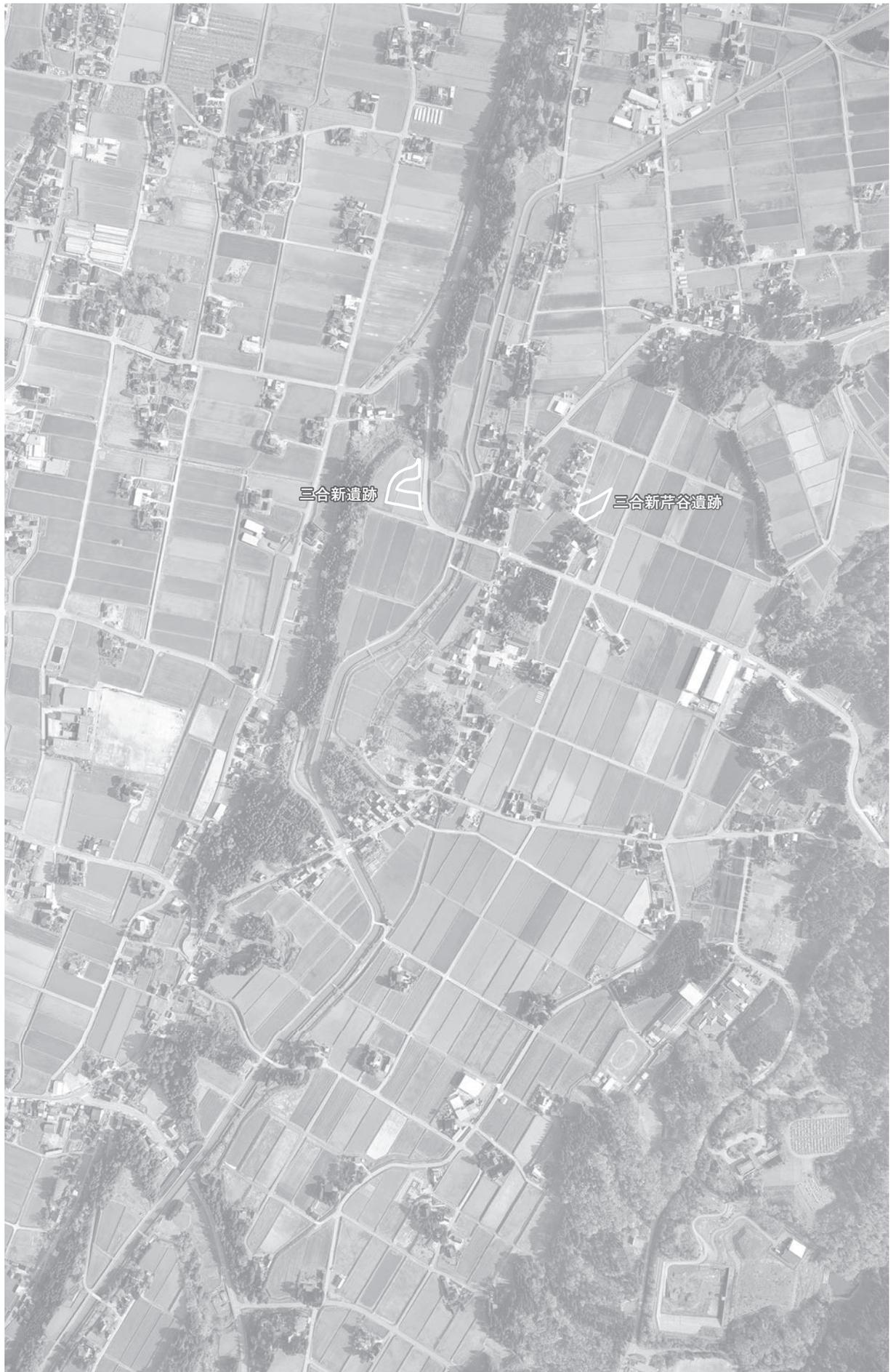
（パレオ・ラボAMS年代測定グループ 伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絃一・Zaur Lomtadze・小林克也・竹原弘展）

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.  
 狩野 陸 (2008) 串田新式・大杉谷式土器. 小林達雄編「総覧縄文土器」: 480-485, アム・プロモーション.  
 加藤三千雄 (2008) 新保・新崎式土器. 小林達雄編「総覧縄文土器」: 450-457, アム・プロモーション.  
 小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編  
 「縄文時代の考古学2 歴史のものさし」: 257-269, 同成社.  
 小島俊彰 (2008) 上山田・天神山式土器. 小林達雄編「総覧縄文土器」: 466-471, アム・プロモーション.  
 工藤雄一郎 (2012) 後氷期の考古編年と<sup>14</sup>C年代. 旧石器・縄文時代の環境文化史, 212-229, 新泉社.  
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編  
 「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.  
 Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafidason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4), 1869-1887.



第29図 暦年較正結果



航空写真 (2009年撮影)

図版2



航空写真（上：1961年撮影 下：1975年撮影）



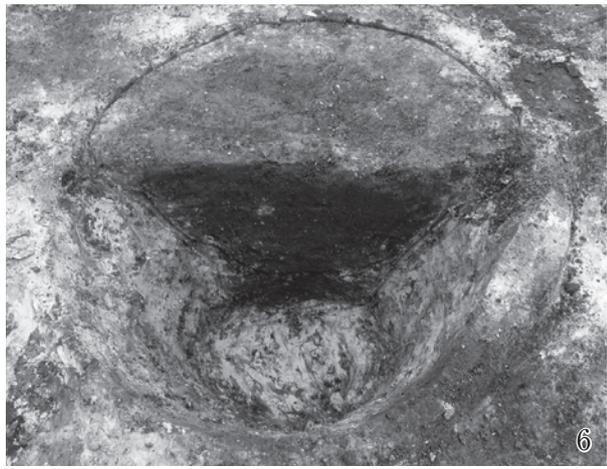
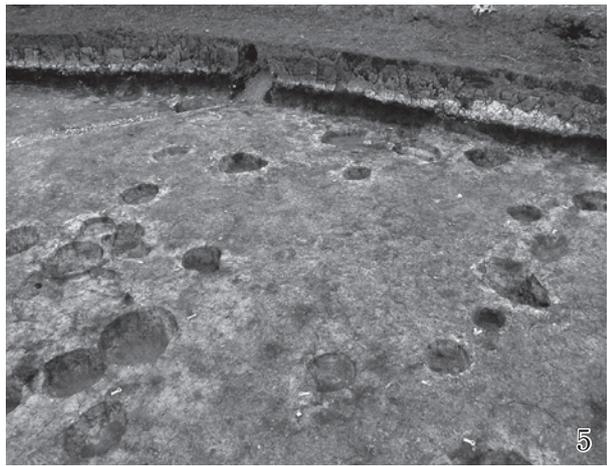
三合新遺跡 遠景  
1. 南から 2. 西から



三合新遺跡 全景  
1. 東から 2. 西から

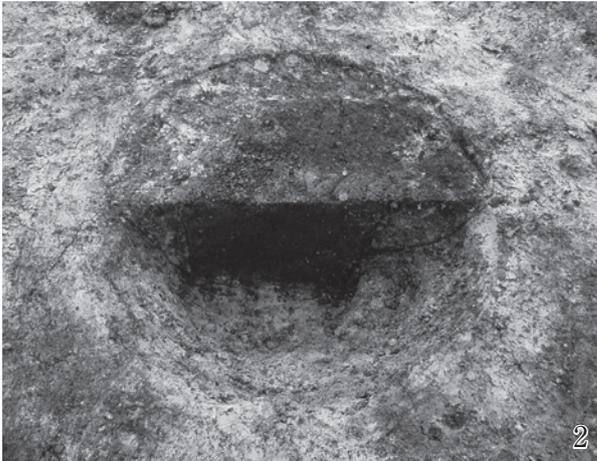


三合新遺跡 竪穴建物群  
1・2. 南西から



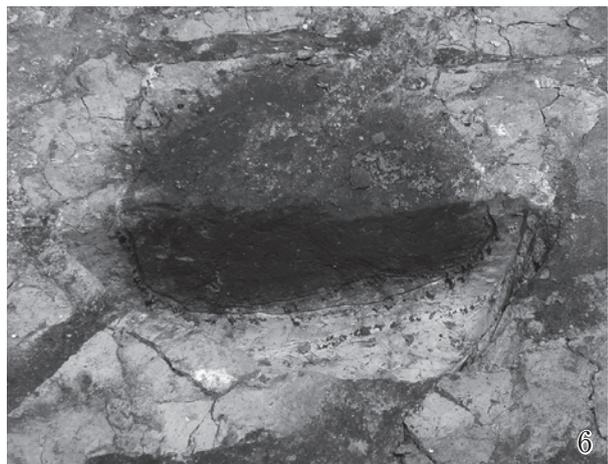
三合新遺跡 竪穴建物

1. SI1 (南東から) 2. SI1 SP246 (南から) 3. SI2 (南東から) 4. SI2 SK316 (南から)  
5. SI3 (南東から) 6. SI3 SP391 (南から) 7. SI4 (南から) 8. SI4 SP386 (東から)



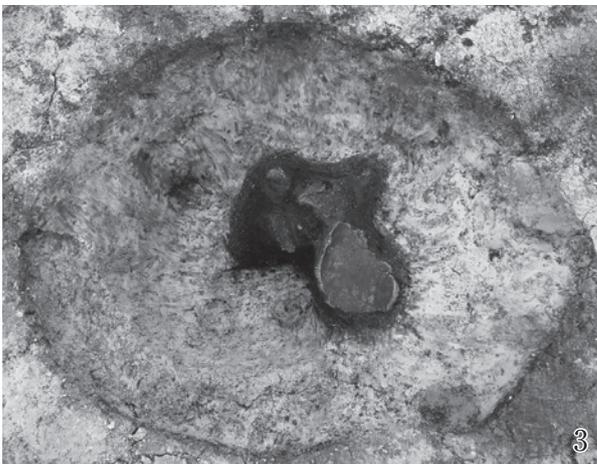
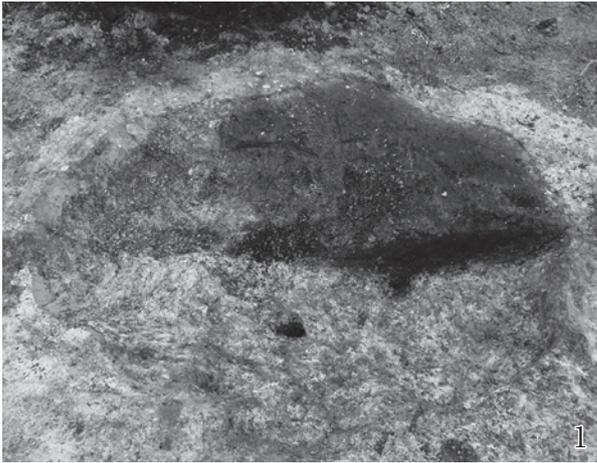
三合新遺跡 竪穴建物

1. SI5 (南東から) 2. SI5 SP346 (東から) 3. SI5 SK351 (東から) 4. SI6 (南から)  
5. SI7 (南から) 6. SI7 SP444 (北から) 7. SI8 (南から) 8. SI8 SP199 (北から)



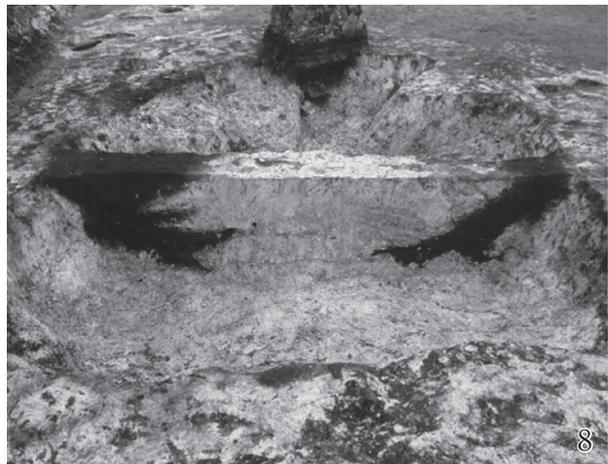
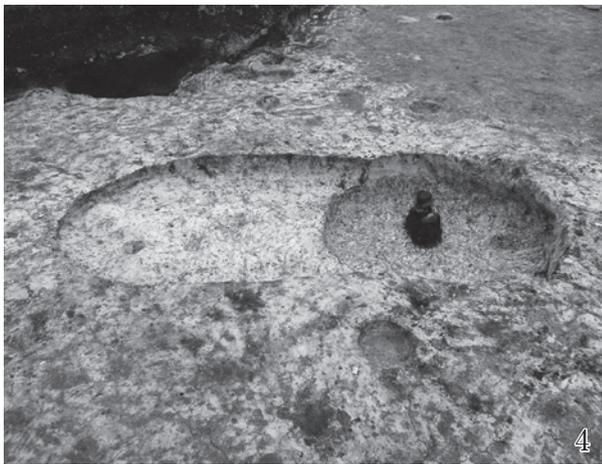
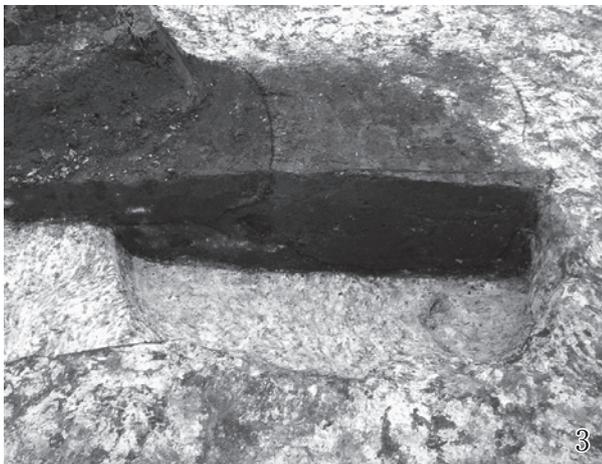
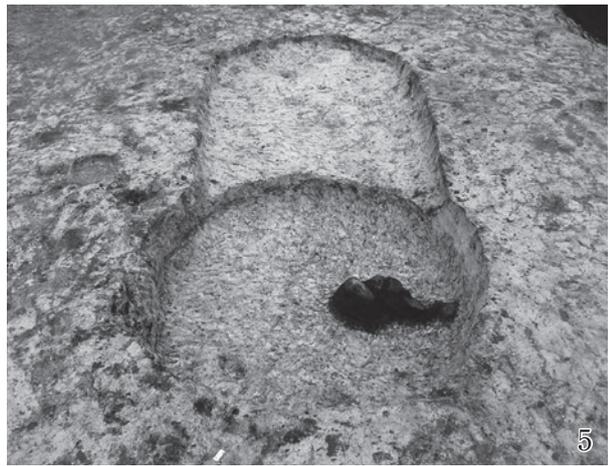
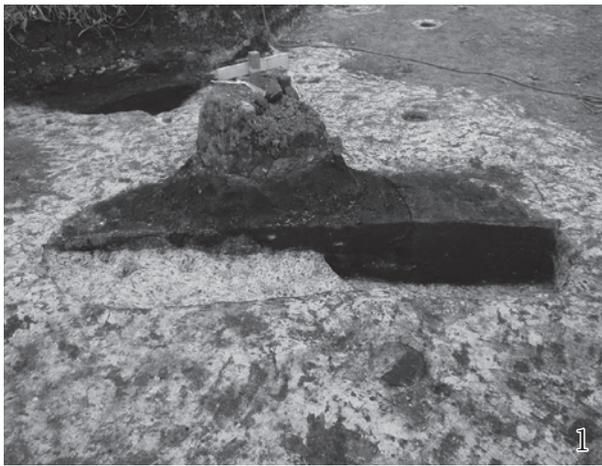
三合新遺跡 竪穴建物・掘立柱建物・土坑

1. SI9 (北西から) 2. SI9 SP188 (南から) 3. SI10 (南東から) 4. SI10 SP259 (東から)  
5. SB1 (北東から) 6. SB1 SP35 (南から) 7. SK16 (西から) 8. SK17 (北から)



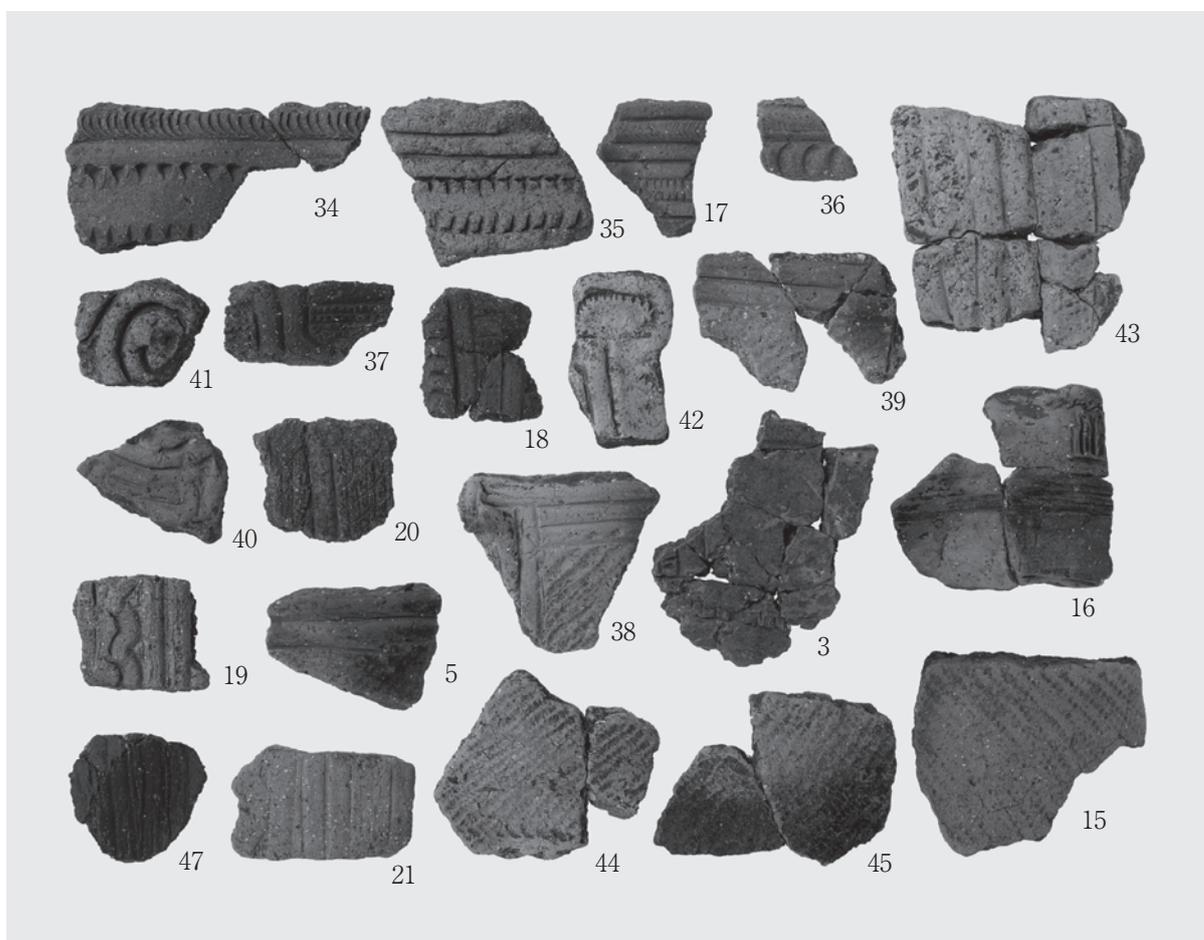
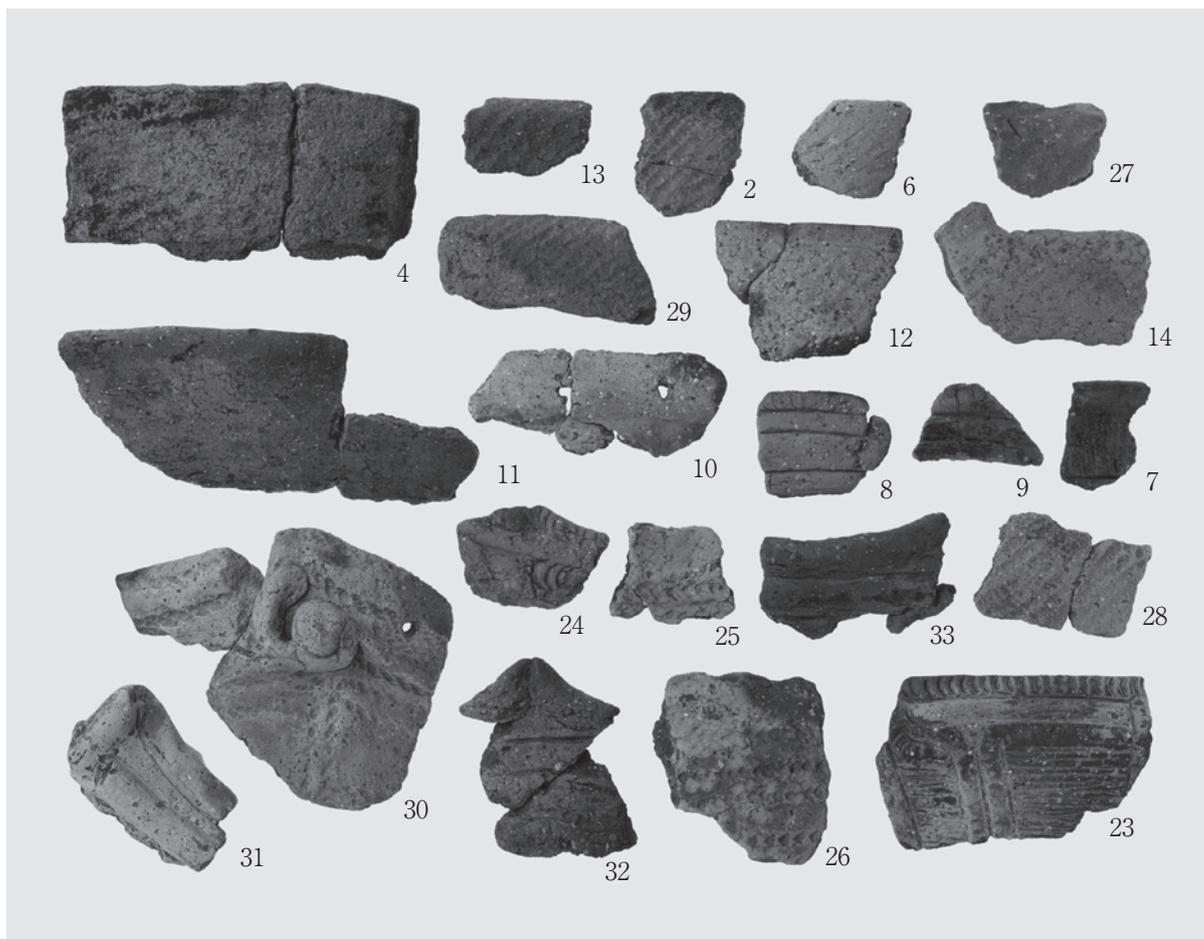
三合新遺跡 土坑

1. SK189 (西から) 2. SK190 (西から) 3. SK190土器出土状況 (西から) 4. SK224 (南から)  
5. SK230 (南東から) 6. SK277 (北西から) 7. SD307・SK308 (西から) 8. SK330 (南東から)



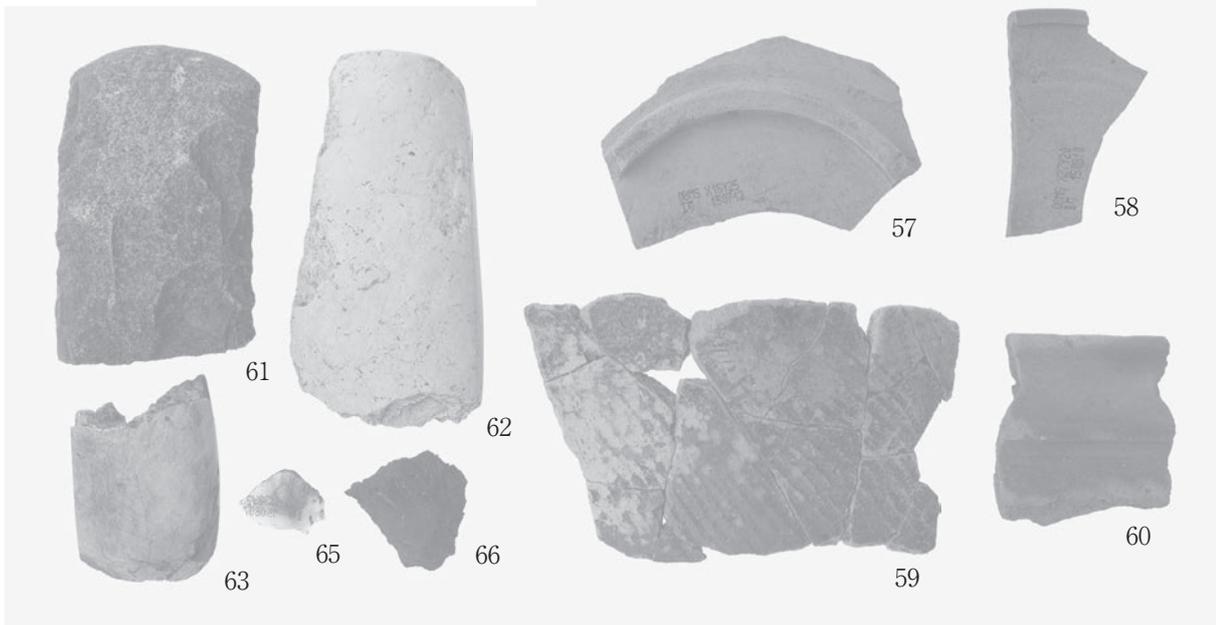
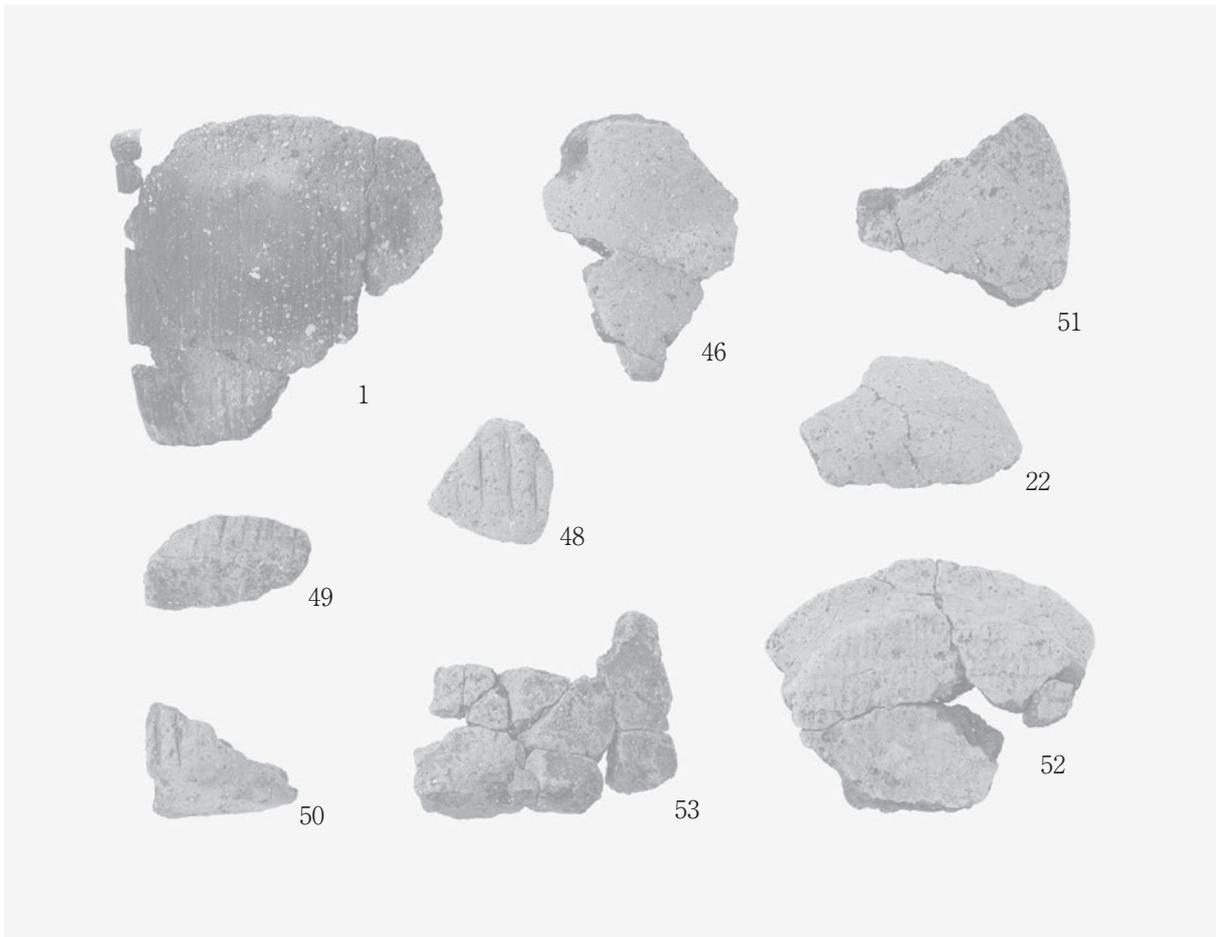
三合新遺跡 土坑・倒木痕

1. SK471・SK472 (北から) 2. SK471 (北から) 3. SK472 (北から) 4. SK471・SK472 (北から)  
5. SK471・SK472 (西から) 6. SK472出土状況 (南から) 7. 倒木痕③ (東から) 8. 倒木痕④ (南西から)



三合新遺跡 縄文土器

SK304(3) SK308(2) SK351(4・5) S14 SP386(6) SK472(7~21・23) 包含層



三合新遺跡 縄文土器・須恵器・土師器・石製品  
SK190(1) SK400(60) SK472(22・66) 包含層



三合新芹谷遺跡 遠景  
1. 東から 2. 西から



三合新芹谷遺跡 全景

1. 東から 2. 西から



三合新芹谷遺跡 全景・土坑

1. 南から 2. SK157 (西から) 3. SK157断割 (東から) 4. SK271 (北から) 5. SK271断割 (北から)

# 報告書抄録

ふりがな	みあいしんいせき・みあいしんせりだにいせきはつかつちょうさほうこく							
書名	三合新遺跡・三合新芹谷遺跡発掘調査報告							
副書名	国道359号砺波東バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘報告							
巻次	II							
シリーズ名	富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第71集							
編著者名	新宅 茜							
編集機関	公益財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒930-0887 富山県富山市五福4384番1号 TEL 076-442-4229							
発行年月日	西暦2017年3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みあいしんいせき 三合新遺跡	となみし 砺波市 みあいしん 三合新	16208	208124	36度 38分 8秒	137度 1分 14秒	20150709～20150829	2,030	国道359号砺波東バイパス建設に伴う事前調査
みあいしんせりだにいせき 三合新芹谷遺跡	となみし 砺波市 みあいしん 三合新	16208	208125	36度 38分 7秒	137度 1分 25秒	20150703～20150810	1,130	国道359号砺波東バイパス建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
三合新遺跡	集落	縄文時代 中期前葉～中葉		竪穴建物 土坑 溝		縄文土器・石製品		
		古代		掘立柱建物				
三合新芹谷遺跡	集落	縄文時代 後期前葉～中葉		落とし穴状土坑 土坑			放射性炭素年代測定により時代を特定した	
<b>要約</b> ・三合新遺跡は砺波市東部にある芹谷野段丘上の縁辺部に位置する。縄文時代中期前葉～中葉の竪穴建物群を検出した。圃場整備によって削平されていたため、建物の柱穴のみを検出し、その他の屋内施設としては貯蔵穴の可能性のある土坑を検出した。出土量は少ないが、縄文土器の年代は縄文時代中期前葉～中期中葉で、竪穴建物柱穴の埋土中に含まれていた炭化材の放射性炭素年代測定を行ったところ、土器の年代と齟齬しないと考えられる結果を得た。 ・三合新芹谷遺跡は芹谷野段丘上から和田川への緩斜面に位置する。落とし穴状土坑を含めて440基の土坑を検出したが、出土遺物に乏しく、落とし穴状土坑の埋土中に含まれていた炭化物の放射性炭素年代測定を行って、縄文時代後期前葉～中葉との結果を得た。								

2017（平成29）年2月27日 印刷  
2017（平成29）年3月10日 発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第71集

## 三合新遺跡 発掘調査報告 三合新芹谷遺跡

— 国道359号砺波東バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘報告II —

編集・発行 公益財団法人富山県文化振興財団  
埋蔵文化財調査事務所  
〒930-0887 富山市五福4384番1号  
TEL 076-442-4229

印刷 中村印刷工業株式会社  
〒930-0039 富山市東町2丁目3-22  
TEL 076-424-4616